

Kyou duka
教 塚 遺 跡

Tochi ya
枋 屋 遺 跡

Dai rou
大 郎 遺 跡

一般国道325号国道改築事業（田原バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第67集
『教塚遺跡 柝屋遺跡 大郎遺跡』正誤表

ページ・図番号	誤	正
p3-16	嘉承2年(1107年)と記された経筒と鏡が出土した記録…	嘉承2年(1107年)頃を初鑄年とする大観通宝・積上式経筒・鏡が出土した記録…
p4第1図下	8 南平第3遺跡	8 南平第4遺跡
同上	15 中ノ原遺跡	15 南平第3遺跡
同上	16 神殿遺跡(A地区・B地区)	16 中ノ原遺跡
同上	17 丸山石棺群	17 神殿遺跡(A地区・B地区)
同上	18 二上山遺跡	18 丸山石棺群
同上	19 崩野城跡	19 二上山遺跡
同上	20 玄武山城跡	20 崩野城跡
同上	21 柚木野城跡	21 玄武山城跡
同上	23 太鼓台跡	22 柚木野城跡
同上	23 亀頭山城跡	23 太鼓台跡
同上	24 下の城跡	24 亀頭山城跡
同上	25 高城跡	25 古城跡
同上	26 河内御番所	26 下の城跡
同上	記載なし	27 高城跡
同上	記載なし	28 河内御番所跡
p13 蓋部スケール	10cm	5cm
台座部スケール	10cm	5cm
復元想定図スケール	20cm	12.5cm
p21-11	第四章 柝屋遺跡の調査	第三章 柝屋遺跡の調査(訂正シールあり)✓
p21 第12図	右下スケール	スケールは間違いです。除去してください。✓
p43 第1表	黒曜石(西小国)	黒曜石(腰岳)
p49 右上	記載なし	図版11(訂正シールあり) ✓
p50 左上	図版11	図版12(訂正シールあり) ✓

序

宮崎県教育委員会では、一般国道325号国道改築事業（田原バイパス）に伴い、教塚遺跡・栃屋遺跡・大郎遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

遺跡の所在する高千穂町北西部の田原・河内地区は、山深い立地条件にありながら、古くから交通の要所にあり、人々が暮らしを営み続けてきた場所です。今回の調査では、教塚遺跡で中世の経筒・近世の石組遺構が、栃屋遺跡で近世と考えられる道状遺構が、大郎遺跡で縄文時代から古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出され、そうした土地柄を示すような幅広い時代の遺跡が確認されました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例 言

1. 本報告書は、一般国道325号国道改築事業（田原バイパス）に伴い宮崎県教育委員会が行った教塚遺跡・桁屋遺跡・大郎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査期間は以下のとおりである。

教塚遺跡・桁屋遺跡 平成12年7月3日～平成12年10月4日
大郎遺跡 平成13年8月22日～平成13年10月26日
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は、教塚遺跡・桁屋遺跡を主に甲斐貴充・安楽哲史が行い、大郎遺跡を主に福田泰典・重留康宏が行った。第4図と第13図の地形測量図は（有）南州測量設計に、空中写真撮影は（有）スカイサーベイに委託した。
5. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充・福田泰典が整理補助員の協力を得て行った。
6. 本書で使用した第1図「遺跡位置図①」は高千穂町役場発行の高千穂町全図5万分の1図を、第2図「遺跡位置図②」は宮崎県発行の高千穂町上野村森林基本図を基に作成した。
7. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
8. 本書で使用した方位は、主として座標北（座標第Ⅱ系）を使用している。その他「M.N」と記載しているものは磁北（磁針方位は西偏約6.5°）である。レベルは海拔絶対高である。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S A…竪穴住居跡 S E…道状遺構
10. 本書の遺構及び遺物実測図の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。

竪穴住居跡…1/60・1/40 土器（縄文・弥生）…1/3 経筒…1/2
石器…1/2・2/3
11. 本書の執筆は、第Ⅰ章－1は松林豊樹（県文化課）、第Ⅰ章－2～第Ⅳ章は甲斐、第Ⅴ章は福田が行い、編集は甲斐貴充・福田泰典が担当した。
12. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	1~5
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1~2
第3節	遺跡の位置と環境	2~5
第II章	教塚遺跡の調査	6~20
第1節	調査の経過	6~7
第2節	調査の記録	8~13
第3節	教塚遺跡のまとめ	14~15
第III章	枳屋遺跡の調査	21~28
第1節	調査の経過	21~23
第2節	調査の記録	24
第IV章	大郎遺跡の調査	29~50
第1節	調査の経過	29
第2節	基本層序	29~32
第3節	調査の記録	33~45
第4節	大郎遺跡のまとめ	46

挿図目次

第1図	遺跡位置図① (1/100,000)	4
第2図	遺跡位置図② (1/1,500)	5
第3図	教塚遺跡 グリッド配置図 (1/500)	6
第4図	教塚遺跡 地形測量図 (1/400)	7
第5図	教塚遺跡 遺構分布図 (1/400)	7
第6図	教塚遺跡 道状遺構土層断面図 (1/50)	9
第7図	教塚遺跡 石組遺構断面図 (1/50)	10
第8図	教塚遺跡 石組遺構周辺部土層断面図 (1/50)	10
第9図	教塚遺跡 石組遺構・石積遺構図 (1/40)	11
第10図	教塚遺跡 置石遺構図 (1/40)	12
第11図	教塚遺跡 出土経筒片実測図 (1/2) 及び経筒復元想定図 (1/5)	13
第12図	枳屋遺跡 グリッド配置図 (1/500)	21
第13図	枳屋遺跡 地形測量図 (1/500) 及び道状遺構土層断面図① (1/50)	22
第14図	枳屋遺跡 道状遺構土層断面図② (1/50)	23
第15図	大郎遺跡 基本層序模式図	29
第16図	大郎遺跡 土層堆積状況図 (B2・B3グリッド付近) (1/80)	30
第17図	大郎遺跡 グリッド配置図 (10mグリッド) (1/600)	30
第18図	大郎遺跡 周辺地形図 (1/1,000)	31
第19図	大郎遺跡 遺構分布図 (1/300)	32
第20図	大郎遺跡 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第22図	大郎遺跡 1号竪穴住居跡土石流入状況 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/4)	34
第23図	大郎遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)	35
第23図	大郎遺跡 2号竪穴住居跡実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	36
第24図	大郎遺跡 3号竪穴住居跡実測図 (1/40)	37

第25図	大郎遺跡	遺構および遺物分布図 (1/200)	38
第26図	大郎遺跡	出土遺物実測図1 (1/3)	40
第27図	大郎遺跡	出土遺物実測図2 (1/3)	41
第28図	大郎遺跡	出土遺物実測図3 (1/3)	42
第29図	大郎遺跡	出土遺物実測図4 (2/3)	42
第30図	大郎遺跡	出土遺物実測図5 (1/2)	43
第31図	大郎遺跡	出土遺物実測図6 (1/3)	44

表 目 次

第1表	大郎遺跡	出土石器計測表	43
第2表	大郎遺跡	出土遺物観察表	45

図 版 目 次

図版1	①教塚遺跡と遠景 (南東方向を望む)	16
図版2	①教塚遺跡全景 (上から) / ②教塚遺跡石組遺構 (東側正面から)	17
図版3	①教塚遺跡石組遺構 (右側壁) / ②教塚遺跡石組遺構 (左側壁) /	18
	③教塚遺跡石積遺構断面 / ④教塚遺跡石積遺構 (西側から) /	
	⑤教塚遺跡石積遺構 (上から) / ⑥教塚遺跡石組遺構・石積遺構断面図	
図版4	①教塚遺跡石組遺構・石積遺構 (上から) /	
	②教塚遺跡石組遺構・石積遺構及び周辺部 (上から) / ③教塚遺跡置石遺構 /	19
	④教塚遺跡道状遺構 (東側から) / ⑤教塚遺跡遠景 (田原バス停付近から)	
図版5	①教塚遺跡出土経筒蓋①正面 / ②教塚遺跡出土経筒片蓋①表面 /	20
	③教塚遺跡出土経筒蓋①裏面 / ④教塚遺跡出土経筒片蓋②正面 /	
	⑤教塚遺跡出土経筒片蓋②表面 / ⑥教塚遺跡出土経筒片蓋②裏面 /	
	⑦教塚遺跡出土経筒台座部正面 / ⑧教塚遺跡出土経筒台座部表面 /	
	⑨教塚遺跡出土経筒台座部裏面	
図版6	①枋屋遺跡と遠景 (東北東方向を望む)	25
図版7	①枋屋遺跡全景 (上から)	26
図版8	①枋屋遺跡と遠景 / ②枋屋遺跡道状遺構-1 (西側から) /	27
	③枋屋遺跡道状遺構-2 (東側から) / ④枋屋遺跡道状遺構-3 (東側から) /	
	⑤枋屋遺跡トレンチ1土層断面図 / ⑥枋屋遺跡トレンチ2土層断面図	
図版9	①大郎遺跡と遠景 (東北東方向を望む)	47
図版10	①大郎遺跡全景 (上から) / ②1号竪穴住居跡土石流入状況 /	48
	③1号竪穴住居跡完掘状況 / ④1号竪穴住居跡内配石遺構 /	
	⑤2号竪穴住居跡埋土状況 / ⑥2号竪穴住居跡完掘状況 /	
	⑦3号竪穴住居跡埋土状況 / ⑧3号竪穴住居跡完掘状況	
図版11	①1号竪穴住居跡出土遺物1 / ②1号竪穴住居跡出土遺物2 /	49
	③1号竪穴住居跡出土遺物3 / ④1号竪穴住居跡出土遺物4 /	
	⑤1号竪穴住居跡出土遺物5 / ⑥1号竪穴住居跡出土遺物6 /	
	⑦2号竪穴住居跡出土遺物 / ⑧大郎遺跡出土縄文土器 (I類・II類) /	
	⑨大郎遺跡出土縄文土器 (III~VII類)	
図版12	①大郎遺跡出土縄文土器 (VIII類) / ②大郎遺跡出土石器1 /	50
	③大郎遺跡出土石器2 / ④大郎遺跡出土土器1 (弥生~古墳) /	
	⑤大郎遺跡出土土器2 (弥生~古墳) / ⑥大郎遺跡出土土器3 (免田式) /	
	⑦中世陶磁器 (上:内面, 下:外面)	

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県では、高千穂町内の交通緩和と交通網整備の一環として、昭和63年から一般国道325号線田原バイパスの建設を進めている。

県文化課では、平成12年度以降の事業予定地内において遺跡が影響を受ける可能性が考えられたため、平成11年8月2日～3日に教塚遺跡・平成12年2月28日～3月3日に栃屋遺跡・平成13年1月17日～18日に大郎遺跡の試掘調査を行った。試掘調査の結果、教塚遺跡では中世の銅製経筒片が、栃屋遺跡では道状遺構が、大郎遺跡では縄文時代晩期の土器・石器が検出された。

試掘調査の結果を受けて、平成12年度に教塚遺跡・栃屋遺跡、平成13年度に大郎遺跡の発掘調査を実施した。

3遺跡の整理作業については、各調査年度から平成14年度まで継続して行い、今回の報告書作成に至った。

第2節 調査の組織

(平成12年度) 教塚遺跡・栃屋遺跡・(平成13年度) 大郎遺跡 調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊地 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主査	福田 泰典 (大郎遺跡担当・平成13年度)
同 主事	甲斐 貴充 (教塚遺跡・栃屋遺跡担当・平成12年度)
同 調査員	安楽 哲史 (教塚遺跡・栃屋遺跡担当・平成12年度)
同 調査員	重留 康宏 (大郎遺跡担当・平成13年度)

(平成14年度) 教塚遺跡・栃屋遺跡・大郎遺跡 整理・報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大藪 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務係長	野邊 文博
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主査	福田 泰典 (大郎遺跡担当)
同 主任主事	甲斐 貴充 (教塚遺跡・栃屋遺跡担当)

第3節 遺跡の位置と環境 (第1図・第2図)

高千穂町は、ほぼ九州中央部、宮崎県北西端部に位置し、熊本県と大分県と県境をもって隣接している。また、高千穂町は、九州山地中にあり、北方から東方にかけての祖母山系・西方の阿蘇外輪山・南方の椎葉連山に囲まれ、盆地を形成している。そのため、平地に乏しく、遺跡の殆どが急峻な傾斜面に位置する。盆地には、北西から南東にかけて横断貫流している五ヶ瀬川が流れ、五ヶ瀬川に向かって周辺山地の分水嶺を水源とする大小多数の河川が注ぎ込んでいる。教塚遺跡(第1図-1)・朽屋遺跡(第1図-2)・大郎遺跡(第1図-3)は、その河川の一つである上野川左岸側、赤川浦岳(標高1,232m)から派生する丘陵上(教塚遺跡…標高約530m・朽屋遺跡…標高約550m・大郎遺跡…標高約540m)に位置する。

遺跡の周辺は、発掘調査例こそ少ないが、幅広い時代の遺跡が数多く確認されている。以下、簡単ではあるが、周辺遺跡の概要を年代順に概説する。

■旧石器時代～縄文時代

旧石器時代遺跡の調査例は、付近ではナイフ形石器が出土した宮ノ前第2遺跡(第1図-4)と細石核・細石刃が出土した阿蘇原上遺跡(第1図-5)と少ないが、同じ五ヶ瀬川流域において、出羽洞穴遺跡(西臼杵郡日之影町見立)・岩土原遺跡(西臼杵郡北方町笠下)・蔵田遺跡(西臼杵郡北方町辰)・矢野原遺跡(西臼杵郡北方町辰)などで旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代において、爪形文土器や石槍が出土した阿蘇原上遺跡・石槍が出土した岩戸五カ村遺跡(第1図-6)などの草創期遺跡をはじめ、表採資料であるが押型文土器が出土した薄糸平遺跡(第1図-7)・集石遺構3基が確認された阿蘇原上遺跡・岩戸五カ村遺跡・南平第4遺跡(第1図-8)の早期遺跡、轟B式土器の出土した押方C遺跡(第1図-9)や陣内遺跡(第1図-10)の前期遺跡など、いくつかの遺跡の存在が確認されている。

縄文時代後期～晩期の遺跡は、薄糸平遺跡・陣内遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡(第1図-11)・吾平原第2遺跡(第1図-12)・梅ノ木原遺跡(第1図-13)・セベツ遺跡(第1図-14)・南平第3遺跡(第1図-15)・中ノ原遺跡(第1図-16)・神殿遺跡(第1図-17)と数多い。特に陣内遺跡は、西平式・三万田式・御領式土器の他、土偶・石棒といった呪術具なども出土しており、当地の先進性が伺える。大郎遺跡は、縄文時代晩期の黒川式土器が出土し、新たに縄文晩期の資料として追加されることとなった。

■弥生時代

当地の調査例は中期以降に集中する。中期から後期にかけて遺跡数は増加し、押方C遺跡・薄糸平遺跡・吾平原第2遺跡・南平第3遺跡・神殿A地区遺跡(第1図-17)・神殿B地区遺跡(第1図-17)で確認されている。特に南平第3遺跡では、中期末～後期にかけて26軒の竪穴住居跡が確認された。今回の報告書では、大郎遺跡において弥生時代後期の土器片が出土している。

■古墳時代

古墳時代における当地方の墓制は、丸山石棺群(第1図-18)など箱式石棺も見られるが、横穴墓が

主流である。横穴墓は、高千穂地方全域に分布し、田原地区・上野地区・三田井地区・押方地区・岩戸地区など合計120基以上が確認されている。また、生活遺構としては、宮ノ前遺跡・神殿C地区遺跡などで竪穴住居跡が確認されている。

■歴史時代

歴史時代の遺構・遺物としては、経塚跡・城跡・寺跡などが挙げられる。経塚跡と考えられるのは、二上山遺跡（第1図-19）において、嘉承2年（1107年）と記された経筒と鏡が出土した記録が「高千穂特別記録文献資料」にある。しかし現在、現物が無く確認できない。今回、教塚遺跡で出土した経筒片も12世紀頃のものとなれ、当地が宗教的に重要な位置を占めていたことが推察される。

また、城跡及び関連遺跡も多く、遺跡周辺の河内・田原・上野地区では、崩野城跡（第1図-20）・玄武山城跡（第1図-21）・柚木野城跡（第1図-22）・太鼓台跡（第1図-23）・亀頭山城跡（第1図-24）・古城跡（第1図-25）・下の城跡（第1図-26）・高城跡（第1図-27）などが挙げられる。桁屋遺跡は、調査前に馬見原（マンバル）城跡の可能性が指摘されたが、今回の調査では城館関連の遺構は検出されなかった。

また、遺跡付近には、江戸時代日向・肥後・豊後の国境に有馬氏が設営した河内御番所（第1図-28）跡が確認されており、当地が交通の要所であったことが推察される。

【参考文献】

高千穂町1973『高千穂町史』

宮崎県1997『宮崎県史』通史編 原始・古代1

九州前方後円墳研究会2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』

宮崎県埋蔵文化財センター1997『広木野遺跡 神殿遺跡A地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集

宮崎県埋蔵文化財センター1999『神殿B・C地区 南平第3遺跡 南平第4遺跡 中ノ原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集

高千穂町教育委員会1983『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書（三田井・押方・向山地区）』

高千穂町教育委員会2002『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書』高千穂町文化財調査報告書第14集

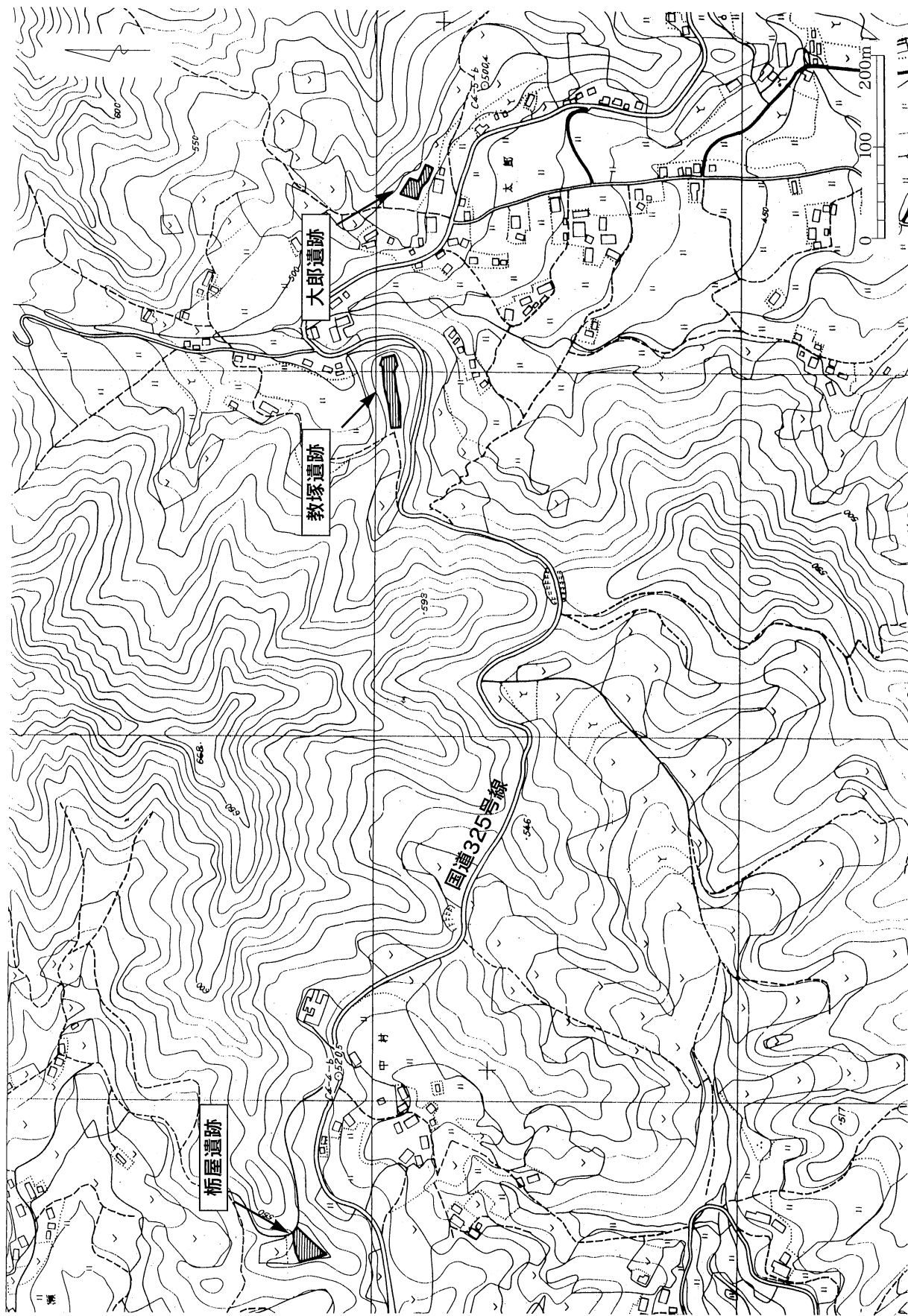
高千穂町教育委員会 2002『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書（町内全域編）』高千穂町文化財調査報告書第14集

宮崎県教育委員会1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 II 詳説編』



- | | | | | | |
|------------|------------|-----------|--------------------|-----------|-------------|
| 1. 教塚遺跡 | 2. 桁屋遺跡 | 3. 大郎遺跡 | 4. 宮ノ前第2遺跡 | 5. 阿蘇原上遺跡 | 6. 岩戸五ヶ村遺跡 |
| 7. 薄糸平遺跡 | 8. 南平第3遺跡 | 9. 押方C遺跡 | 10. 陣内遺跡 | 11. 城ノ平遺跡 | 12. 吾平原第2遺跡 |
| 13. 梅ノ木原遺跡 | 14. セベツト遺跡 | 15. 中ノ原遺跡 | 16. 神殿遺跡 (A地区・B地区) | 17. 丸山石棺群 | 18. 二上山遺跡 |
| 19. 崩野城跡 | 20. 玄武山城跡 | 21. 柚木野城跡 | 22. 太鼓台跡 | 23. 亀頭山城跡 | 24. 下の城跡 |
| 25. 高城跡 | 26. 河内御番所跡 | | | | |

第1図 遺跡位置図① (1/100,000)



第2図 遺跡位置図② (1/1,500)

第Ⅱ章 教塚遺跡の調査

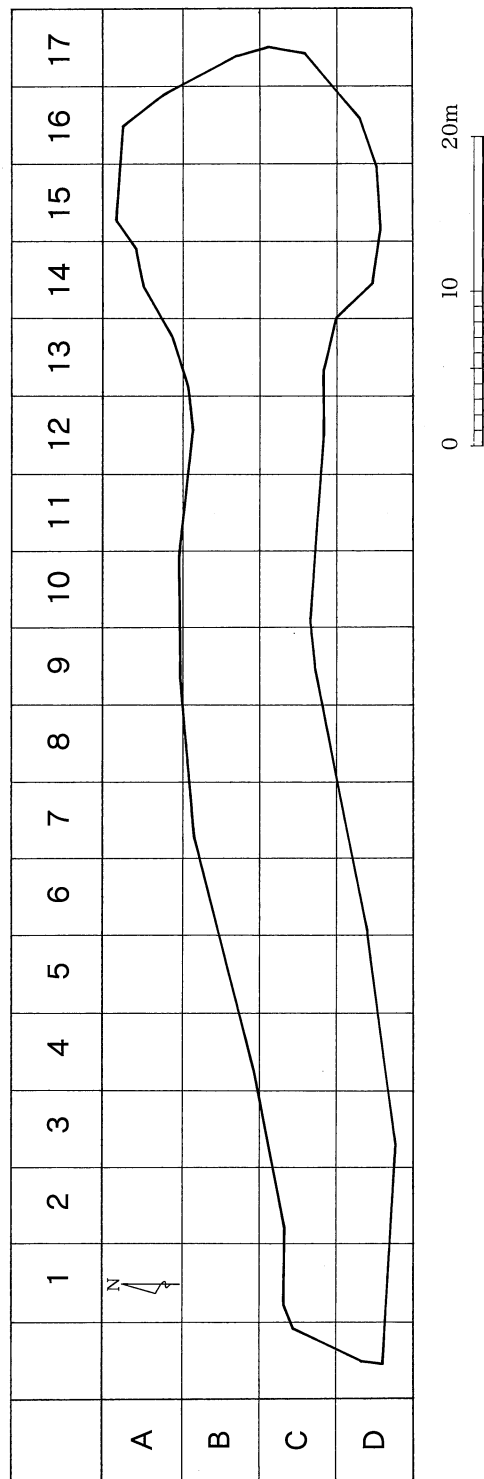
第1節 調査の経過

発掘調査は、文化課が平成11年度に行った試掘調査において、調査区東側の尾根頂部（標高約530m）にある石組遺構の存在、及び石組遺構から経筒片（第11図-1）が出土したという結果を受けて、埋蔵文化財センターが平成12年7月より調査を開始した。なお、調査は、同じ路線上の後述する桁屋遺跡と並行して行うこととなった。所在地は、西白杵郡高千穂町大字田原字教塚である。調査面積は2,000㎡である。

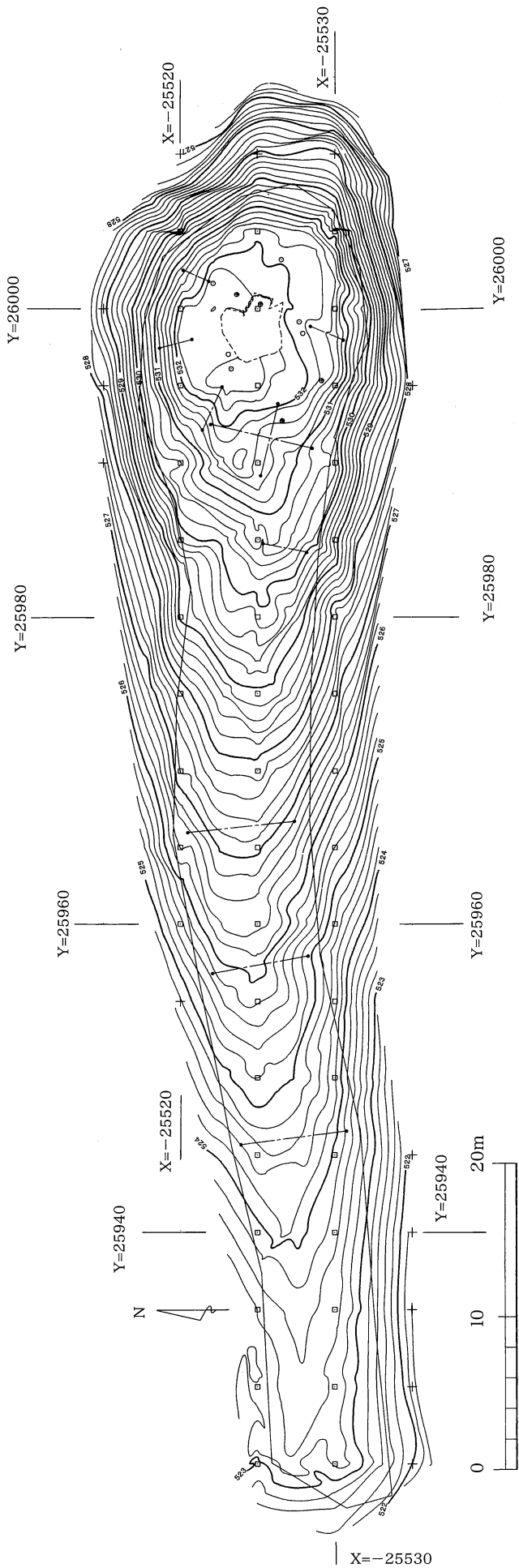
調査区（第3図）は、東西約85m・南北約10~20mと細長く、東に向かって舌状に突出した尾根上であり、登り口である西側以外は急峻な斜面である。調査前は、調査区全体が草木で覆われ、調査区東端部にある石組遺構のところまで歩くのが困難な状態であった。そこで、調査はまず草木を伐採することから始めた。伐採の結果、石組遺構に至る尾根筋によりやく道状遺構が残っていることが判明した。道状遺構にトレンチを設定して断面の精査・記録を行った後に石組遺構周辺部の調査に入った。

石組遺構周辺部の調査は、まずトレンチを設定して精査・記録を行った後に掘り下げを行った。掘り下げの結果、石組遺構周辺部は、尾根頂部を平坦状に人為的削平していることがわかった。石組遺構周辺部の記録後、石組遺構の調査に着手した。石組遺構の精査・記録の後、石組遺構を解体し、周辺部を含めた削平面及び削平面下層まで掘り下げを行い、平成13年10月に調査を終了した。

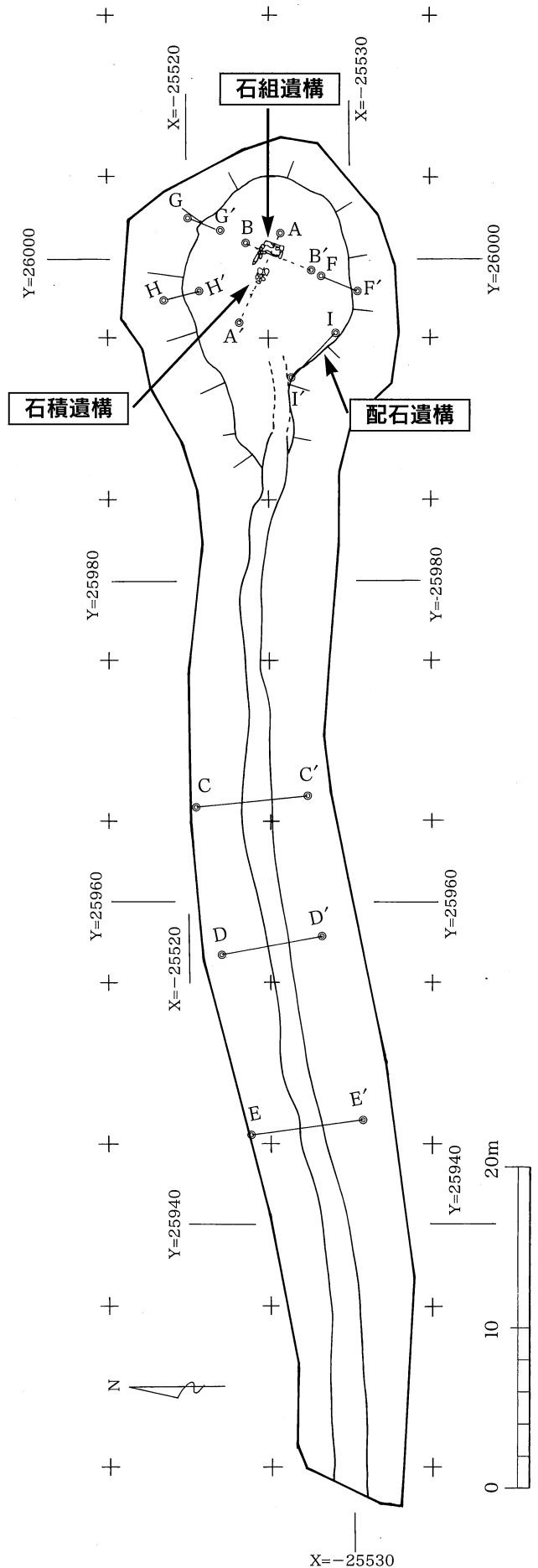
また、調査時の図面作成に際して、国土座標（XY座標）に乗じた10m単位の区画を設置した。更にこの区画を利用して、10m毎に南北方向は北から南へA~D・東西方向は西から東へ1~17と、割り付けを行った。この組み合わせに（例えば「4B区」・「13A区」など）より、調査区域内を5m単位で示すグリッドを設定した（第3図）。以後の文章においてこのグリッドを使用する。



第3図 教塚遺跡 グリッド配置図
(1/500)



第4图 教塚遺跡 地形測量图 (1/400)



第5图 教塚遺跡 遺構分布图 (1/400)

第2節 調査の記録

調査の結果、遺構としては道状遺構1条・石組遺構1基・置石遺構1基が、遺物としては経筒片3点が確認された。以下簡単ではあるが遺構と遺物の個別の記述をおこなう。

(1) 遺構

■道状遺構 (第6図)

道状遺構は、全長70m・幅1.2m程の硬化面をもち、調査区中央部を東西に横断する形で検出された。石組遺構に向かって伸びていることから、道として用いられていたことはほぼ間違いないであろう。ただし、硬化面といっても、表面上のみが硬化している状況であり、土質は周辺と比べて大差ない。表面上のみが硬化していることと土層の堆積状況(第6図)から、人為的に硬化面を造成したのではなく、往来するうちに踏み固められて硬化したものと考えられる。

また、調査区道状遺構を挟む形で、左右に1対ずつ3カ所(西側-B1区・C1区 中央-A10区・B10区 東側-B14区)に1辺40~50cm・厚さ20cm程度の方形の礫が置かれていた。3カ所の内、西側の置き石の近くには、丸太が3本(うち臍穴が開いたものが2本)放置してあった。おそらく、丸太は鳥居で、置き石はその礎石であったと考えられる。ただし、丸太は、状況からさほど古いものではなく、最近のものであると考えられる。

■石組遺構及び周辺部 (第7図・第8図)

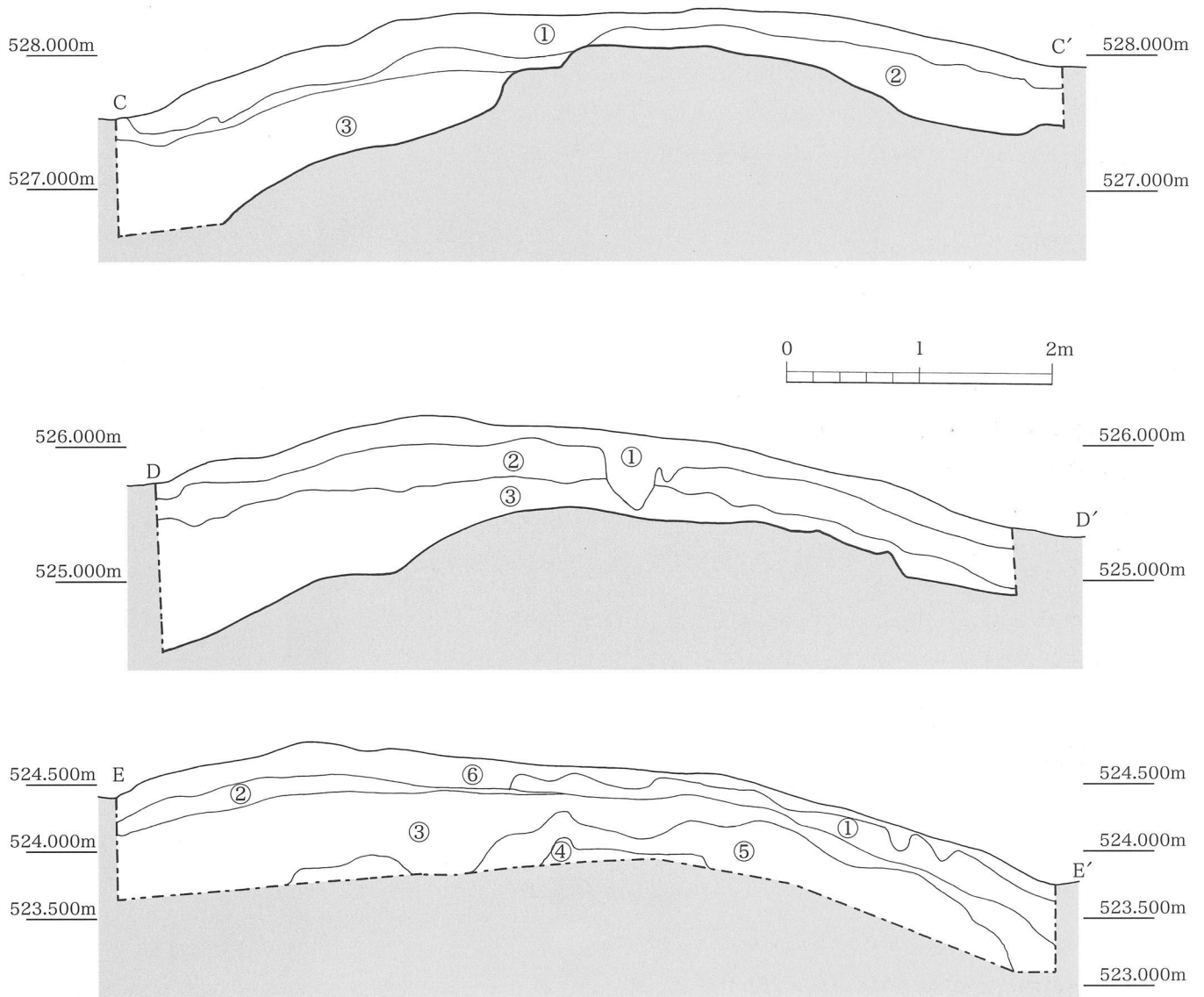
調査区の東端は、舌状尾根の頂部になっており、中心部に石組遺構1基が確認された。調査前は、草木が生い茂り、石組遺構にも土が覆い被さっていた。石組遺構の上には、調査前まで甲斐有雄氏(1829年~1909年)が明治時代に作った青灰色凝灰岩製の金比羅石像が祀られていた。ちなみに、この金比羅石像は、現在遺跡から程なく離れた里道に移設されている。

石組遺構造成当時の遺構面を確認するため、合計3カ所のトレンチを設定した。当初石組遺構周辺の高まりは、盛り土によるマウンドだと考えていた。しかし、トレンチ掘り下げの結果(第8図)、遺構面は、旧地形を削平して作出しており、人的な作為が介在するとの判断に至った。

確認された石組遺構は、東方が正面で大きなマツの木の前3方を囲むように配され、15~60cm程の凝灰岩の板石を石垣状に組んでいる。主軸は、およそN-115°-Sであり、延長方向約2.7km先には竜泉寺を望む。石組遺構は、幅120cm・奥行き75~260cm(後背部を含む)・高さ95cm、平面長方形・横断面矩形を呈する。石組は、最初マツの木の周囲を方形に削り、若干土を礫の裏込めを行っている以外礫一重のみで囲っている。

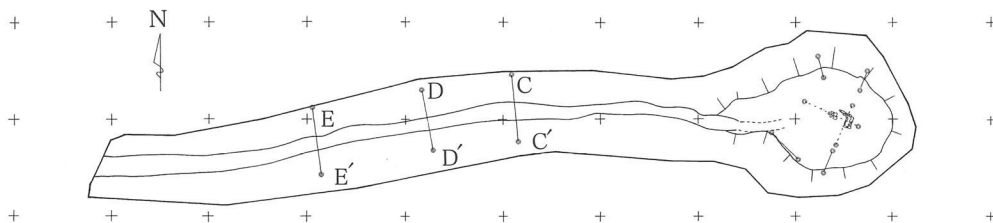
試掘調査時(平成12年度に文化課が実施)であるが、遺構上部より経筒片が1点出土した(第11-1)。更に、本調査時には、中心部のマツの木根部分から経筒片が2点出土した(第11図-2・3)。

石組遺構の後側から、砂岩製の円礫の集積が確認された。石組遺構の一連とも考えられるが、用礫や検出状況から別の遺構の可能性もあるとし、「石積遺構」と呼称することとした。石積遺構は、石組遺構とマツの木を挟んだ反対側に位置する。用礫は、5~30cm程度の砂岩であり、扁平形が多い。積まれた範囲は、110cm×60cm・高さ40cm程度である。石組遺構の礫を「丁寧に組んでいる」印象に対して、石積遺構は礫を「集め積んでいる」という印象を受ける。

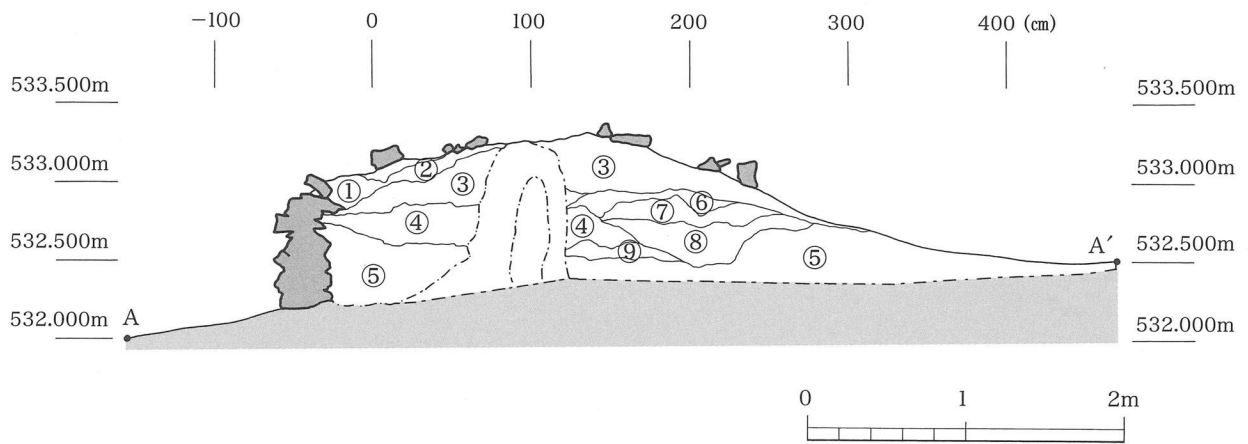


【教塚遺跡 道状遺構 土層注記】

①暗褐色土 (Hue 10YR3/4) …表土。径1mm前後の小礫をわずかに含む。②褐色土 (Hue 10YR4/6) …①層同様、径1mm前後の小礫を含むが、比べて色調が明るく粘性が若干ある。③黄褐色土 (Hue 10YR5/6) …粘性強くしまりあり。径2cm前後の小礫を含む。④乳灰褐色礫層…地山である。乳灰褐色砂岩礫から成る層。⑤暗褐色土 (Hue 10YR3/4) …③層と似ており径2cm前後の小礫を含むが、色調が少し暗い。⑥黒褐色土 (Hue 10YR2/2) …①層同様表土であると考えられる。土質は軟らかい。



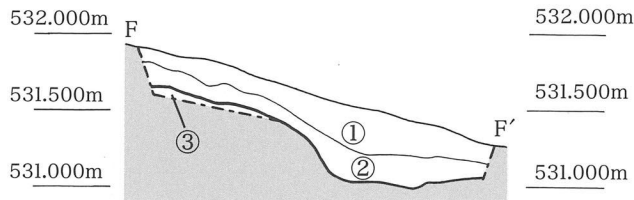
第6図 教塚遺跡 道状遺構土層断面図 (1/50)



【教塚遺跡 石組遺構 土層注記】

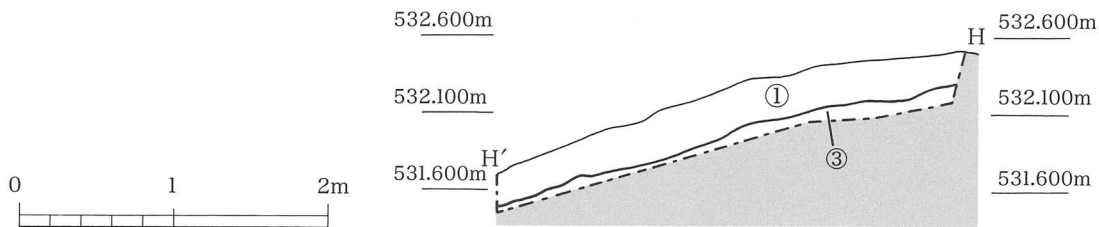
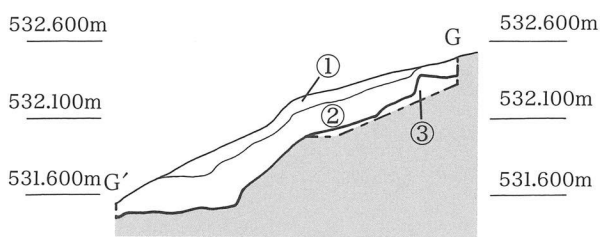
①灰黄褐色土…しまりなくボロボロしている。径1cm以下の角礫を多く含む。②暗黄褐色土…角礫を含まず、径1cm程度の円礫を多く含む。この層から経筒の一部（蓋部①）が出土した。③暗オリーブ褐色土…①層と似ており径1cm程度の角礫を多く含む。④黒オリーブ色小礫層…径2～5cm程度の角礫を主構成とする。⑤黒オリーブ色礫層…④層と同じく礫を主構成とするが、礫の大きさが径10cm前後と大きい。⑥オリーブ褐色土…基本的には③層と似ているが、わずかに色調が明るい。⑦小礫混暗褐色土…④と似ているが、礫の割合が低い。⑧小礫混暗オリーブ褐色土…④層と似ているが、礫の割合が低く、色調が少し明るい。⑨乳灰褐色礫層…地山と色調が似ている。径1～3cmの砂岩小礫が主構成土である。

第7図 教塚遺跡 石組遺構断面図 (1/50)

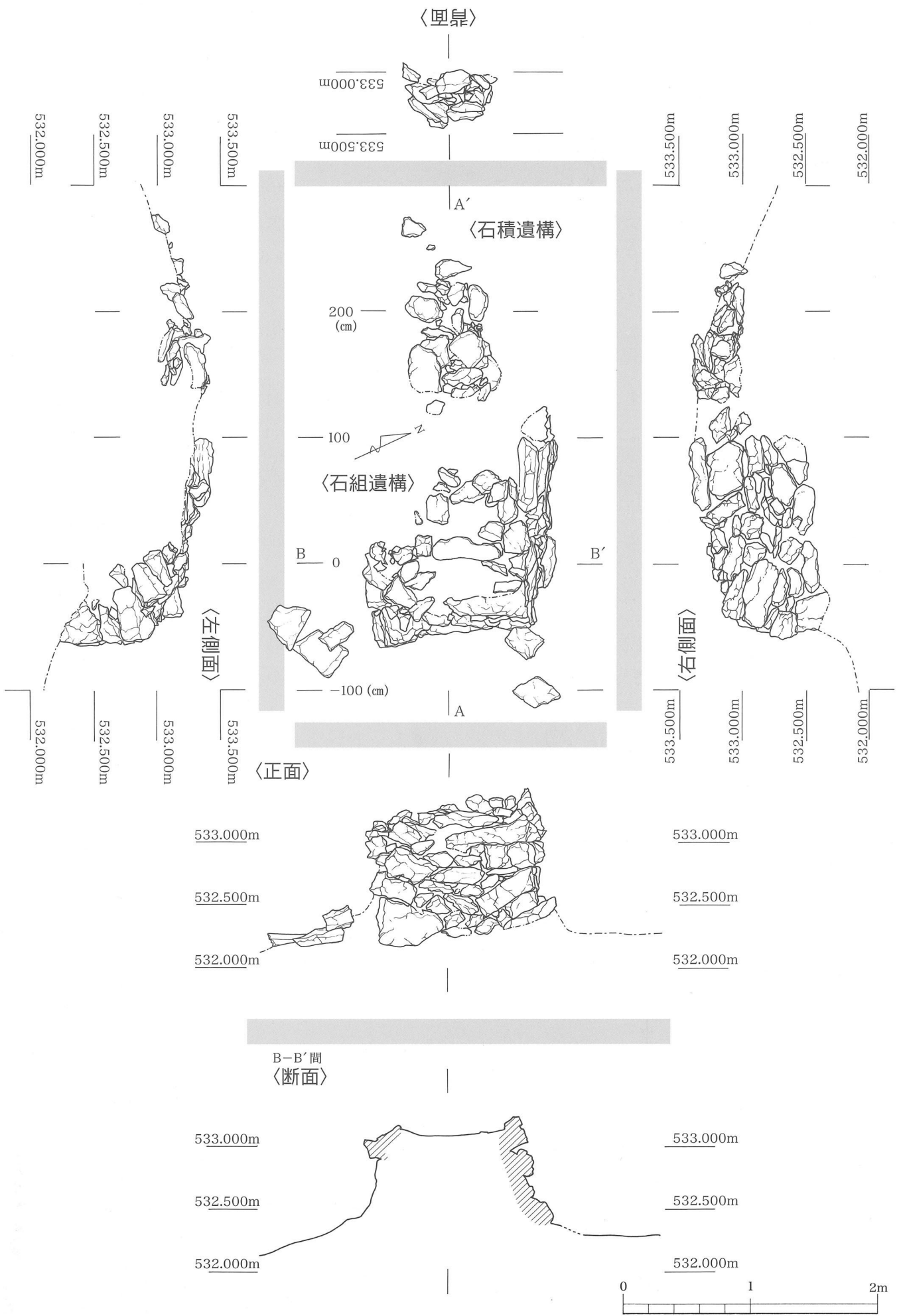


【教塚遺跡 石組遺構周辺部 土層注記】

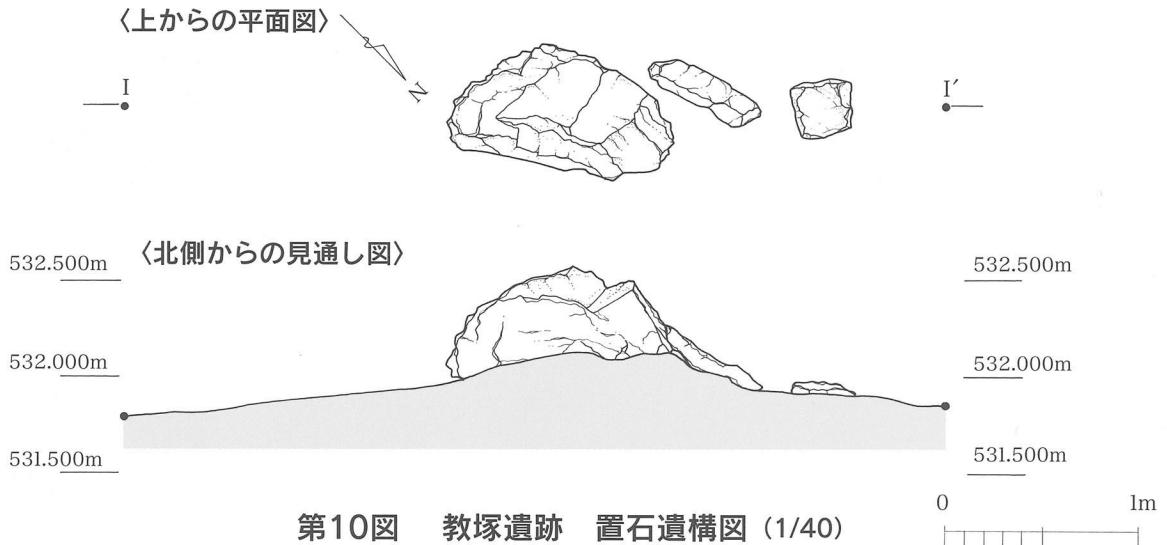
①暗褐色土～褐色土 (Hue 10YR3/4～4/6)
表土。径1mm前後の小礫をわずかに含む。
②黄褐色土 (Hue 10YR5/6)
粘性強くしまりあり。径2cm前後の小礫を含む。
③乳灰褐色礫層
地山である。乳灰褐色砂岩礫から成る層。



第8図 教塚遺跡 石組遺構周辺部土層断面図 (1/50)



第9圖 教塚遺跡 石組遺構・石積遺構圖 (1/40)



第10図 教塚遺跡 置石遺構図 (1/40)

■置石遺構 (第9図)

道状遺構を登り詰めた場所 (B14区) の右手に、凝灰岩製の巨大な置石が確認できた。置石は、長径240cm・短径130cm・高さ100cmであり、中央部に逆三角錐状の窪みがある。窪みは、長辺150cm・短辺80cm・最深部60cmの大きさである。遺跡の場所から考慮して、置石は元からあったとは考えにくく、人為的に持ち込まれたとしか考えられない。何らかの目的でその場所に設置されたと考えられる。設置年代については、特定できる要素が無く、不明である。使用目的も定かではないが、推察するならば、窪み部分に水を溜めた手洗いのための置石だと考えられる。

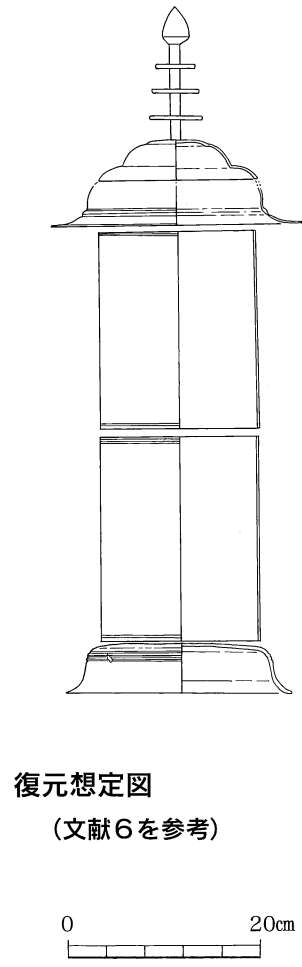
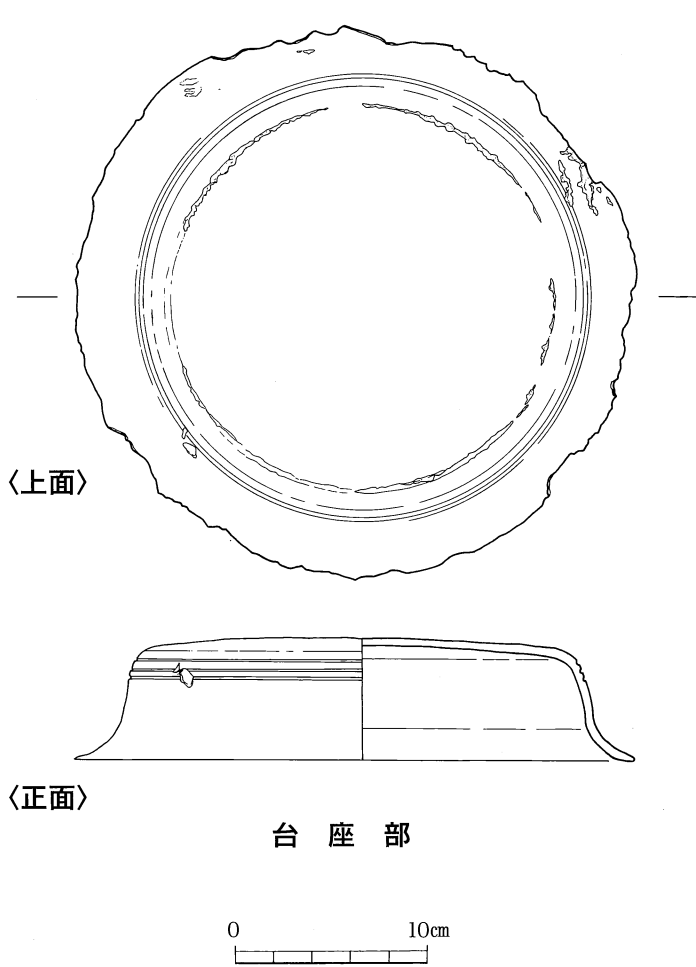
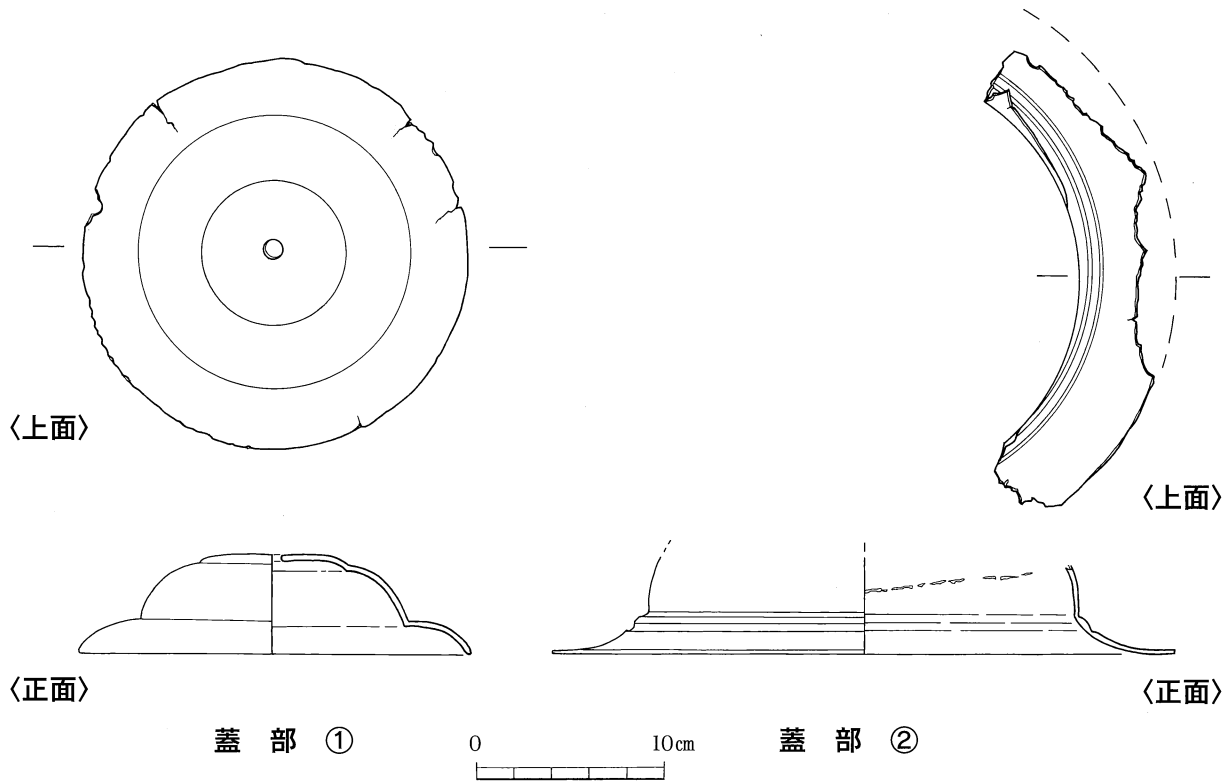
(2) 遺物 (第11図)

経筒片が3点が出土した (第11図1～3)。1～3は、いずれも鋳銅製で、同一個体の積上式経筒の一部と考えられる。

1は傘形被せ蓋式の蓋上部である。文化課が平成11年度に行った試掘調査時に出土した。出土位置は石組遺構前方部、石組遺構内層序の第①層である。内径10.2cm・高さ2.6cm・厚さ0.2cmで、丸屋根形に3つの段を設けた3段構成である。各段の径は、1段目3.8cm・2段目6.9cm・3段目10.2cmである。1段目 (頂部) は、平坦な円座をもち、中心部に内径0.45cmの孔が穿たれている。相輪は出土していないが、頂部の孔に相輪があったと推定できる。

2は傘形被せ蓋式の蓋下部である。出土位置は石組遺構後方のマツの木根中からであり、現位置は保っていなかったと考えられる。最大径 (下部) 16.0cm・最小径 (上部) 10.9cm・厚さ0.1cmで、裾が開く形態をとる。裾部との変換点近くに2条の細沈線が巡る。内側に直線状に並ぶ付着物が確認された。この付着物は、小輪 (筒部) との接着痕跡であると考えられるが、蓋に対して約5°斜行しており、性格については検討の余地を残す。

3は台座である。2と同じマツの木根に絡むような形で出土し、現位置は保っていなかったと考えられる。最大径 (裾) 14.9cm・最小径 (平坦部) 11.2cm・高さ3.1cmで、裾が緩やかなS字形に広がる。台座は、平面形が丸形の1段式台座で、平坦部から胴部への変換点近くで2～3条の細沈線を施している。平坦部には、2と同じような付着物が確認された。付着物は、台座と求心点をほぼ同じくし、径10.0cmである。小輪 (筒部) もしくは台座上部との接着痕と考えられる。



第11図 教塚遺跡 出土経筒片実測図 (1/2) 及び経筒復元想定図 (1/5)

第3節 教塚遺跡のまとめ

調査当初、教塚遺跡は、平安時代の経塚関連遺跡として調査を開始したが、調査によっていくつかの問題点が見えた。ここでは、調査により得られた成果をもとに、問題点を整理しつつ、垣間見えた教塚遺跡について若干ではあるが記述することとする。

(1) 積上式経筒の年代

教塚遺跡からは、積上式経筒片が3点出土した。3点はいずれも同一個体だと判断している。積上式経筒は、一般的に小さな鋳銅製の円筒形の小輪を2～4段に積み上げて1本の経筒を構成する。一般的に積上式経筒は、福岡県を中心とする九州地方全域で確認され、紀年銘をもつ経筒から12世紀代に時期比定されている(文献-1・2・3・4・5・6)。更に、多くの研究者によって、小輪の数や台座の形態変化等を主眼とした編年的位置付けや細分が行われている(文献-3・4・5・6)。こうした研究観に従うと、教塚遺跡出土の積上式経筒は一体どのように位置付けられるか若干の考察を試みる。

教塚遺跡出土経筒は、蓋部と台座部の部分的な出土であるために、全体的なプロポーション(小輪の数・蓋部や台座部の正確なプロポーションなど)が想定しがたい。そこで、断片的な情報を基に全体像の復元を試みてみる。まず、小輪は、細片すら出土しておらず、数・形態等の復元は困難である。次に蓋部は、当初第11図-1(以下「蓋①」)端部の形態から、蓋①のみで蓋部を形成していると判断した。しかし、蓋部①の下端径と第11図-2(以下「蓋②」)の上端径が一致することより、蓋①と蓋②は、本来両者で1つの蓋部を形成していたと推定できる。台座部(第11図-3)は、上部の接着痕が台座上部のものなのか小輪のものなのか判断に窮したが、台座を別造りする類例が存在しないことから、単独で台座部を形成していたと推定した。

復元された経筒像を用いて先の研究観(文献6)に照らしてみると、第11図右下のような復元推定図ができあがる。蓋部形態は、円座をもつ二段笠蓋式と考えられる。台座の形態は、「S」の字状に開き、一段式である。この蓋部と台座部の形態から、二段積上式経筒の井原経塚(福岡県-文献7)・観音谷経塚(福岡県-文献8)出土などの経筒が類例として挙げられる。このことより、小輪は二段である可能性が高い。

また、整理段階において、付着物の除去後に肉眼及び赤外線カメラで観察を行ったが、文字等は確認できなかった。

(2) 石組遺構の築造年代

教塚遺跡出土経筒は、12世紀代の遺物であることはほぼ間違いのないことであるが、次に経筒が埋納されていた石組遺構に注目してみる。

調査開始時に石組遺構は、調査に先駆けて行った試掘段階で積上式経筒が出土したことから、それに伴う遺構と考えていた。しかし、調査の結果3つの矛盾点がみえてきた。

①経筒片の出土状況…出土した3点の経筒片は、合わせても1個体にならず、離れた位置(蓋①は石組遺構前方部・蓋②と台座部は石組遺構後方のクロマツの根間)で出土した。本来経塚であるならば、後世に攪乱されない限り1個体分が原位置近くを保って出土するはずである。離れた位置で破損した状況で出土したということは、後世に人為的攪乱が入ったと推察される。更に蓋①の出土した場所は、石

組遺構の上層であった。これは、石組遺構築造後に「再埋納」が行われたと考えられる。

②石組遺構中に青灰色凝灰岩片が混入している…前述したが、石組遺構の上には、最近まで甲斐有雄氏が明治時代に建てた（文献－9）青灰色凝灰岩製金比羅石像が祀られていた。青灰色凝灰岩は、遺跡内で採れる石材ではなく、持ち込まれた石材である。石組遺構に混入していたということは、偶然でない限り、石組遺構と金比羅石像の作成年代が同じということになる。

③石組遺構と石積遺構…石組遺構が凝灰岩の角礫であることに対し、石積遺構は砂岩の円礫が構成礫である。前述したが、石積遺構は、石組遺構の「組み積んでいる」ことに対して雑多に「集め積んでいる」。両者が異なった性格をもった遺構であることは明らかである。石積遺構は、経塚造営時（平安時代）の経筒保持用石積みの構成礫であったのではなかろうか。

（3）教塚遺跡の構造

以上のことを踏まえて考えると、推測の域を出ないが、教塚遺跡の構造が臆気ながら把握できる。まず、経筒は、形態の特徴などから二段の積上式経筒であり、おそらく12世紀前半頃（平安時代後期）のものである。そして、石組遺構はおそらく明治時代のものである。「平安時代」と「明治時代」、この2つの時代差は、「再埋納」によって生じたものであると推察される。

遺跡は、肥後・豊後に抜ける街道沿いにあり、赤川浦岳（1,232m）から派生する玄武山（972m）など900m級の山々に囲まれながらも、高千穂盆地を望む眺めの良い場所である。遺跡名である「教塚」は、遺跡周辺を指す地名であり、「経塚」があったことを示す。山岳修験者にとっては、経塚造営の場所としてうってつけの場所ではなかろうか。築造当時、経塚は、外容器の有無についてはわからないが、土壇中央部に経筒を据え、その周りを砂岩製の円礫によって囲んでいたタイプだったのではなかろうか。そして時が経ち、明治時代に甲斐有雄氏が荒れ果てていた経塚に凝灰岩製の石組を築き、経筒を再び埋納し直したと考えることができる。ただし、再埋納されたのは、蓋①のみであって、蓋②と台座部はおそらく気づかれずに攪乱された状態であったと推察される。

【引用参考文献】

- 文献1 関 秀夫 1985 『経塚』考古学ライブラリー33 ニューサイエンス社
- 文献2 関 秀夫 1990 「Ⅲ 脊振山1号経塚の出土品」『脊振山1号経塚』脊振村文化財調査報告書第2集
佐賀県脊振村教育委員会
- 文献3 山川 公見子 1996 「北部九州における経筒の一形態－積上式経筒について－」『考古学の諸相』
- 文献4 宮小路 賀宏 1998 「経塚資料覚書（一）」『九州歴史資料館研究論集23』九州歴史資料館
- 文献5 宮小路 賀宏 1999 「経塚資料覚書（二）」『九州歴史資料館研究論集24』九州歴史資料館
- 文献6 村木 二郎 1998 「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』第40集
- 文献7 小田 富士雄 1981 「出光美術館所蔵の九州発見経塚」『古文化談叢』8 九州古文化研究会
- 文献8 島田寅次郎 1926 「築造年代の明かなる経塚」『福岡県史蹟名勝天然紀年物調査報告書』2
- 文献9 富高 則夫 1995 『広野の灯〈甲斐有雄翁伝〉』

なお、遺物整理段階において、宮小路賀宏・村木二郎（国立歴史民俗博物館）の両氏には、多くのご教示をいただいた。文末ではあるが、記して謝意を述べたい。

図版 1



① 教塚遺跡と遠景（南東方向を望む）



①教塚遺跡全景（上から）

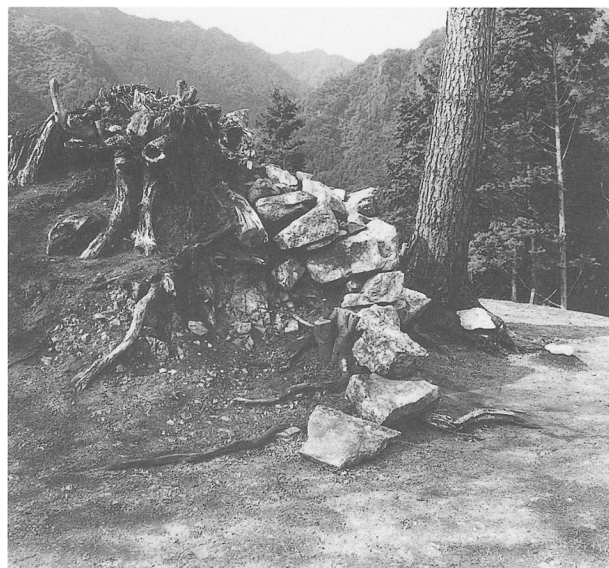


②教塚遺跡石組遺構（東側正面から）

図版3



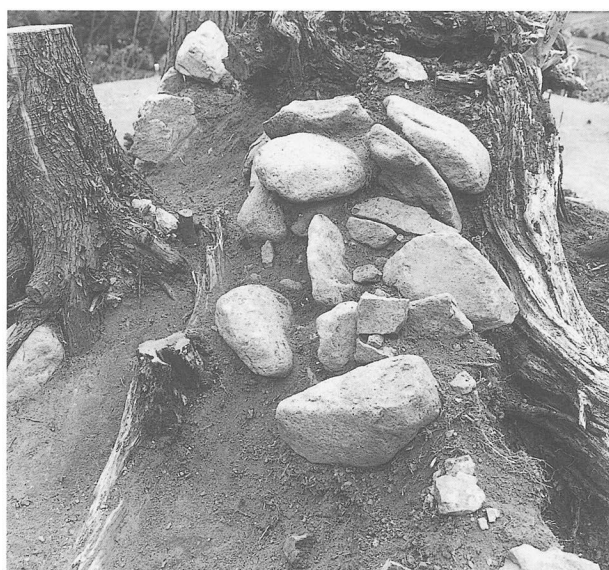
①教塚遺跡石組遺構（右側壁）



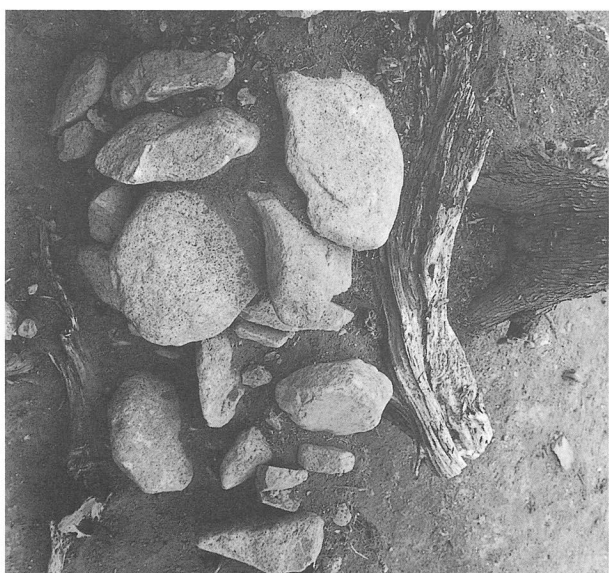
②教塚遺跡石組遺構（左側壁）



③教塚遺跡石積遺構断面



④教塚遺跡石積遺構（西側から）



⑤教塚遺跡石積遺構（上から）



⑥教塚遺跡石組遺構・石積遺構断面図



①教塚遺跡石組遺構・石積遺構（上から）



②教塚遺跡石組遺構・石積遺構及び周辺部（上から）



③教塚遺跡置石遺構



④教塚遺跡道状遺構（東側から）

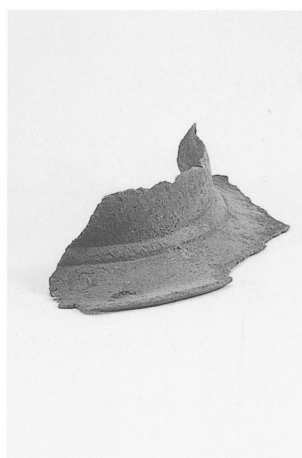


⑤教塚遺跡遠景（太郎バス停付近から）

图版5



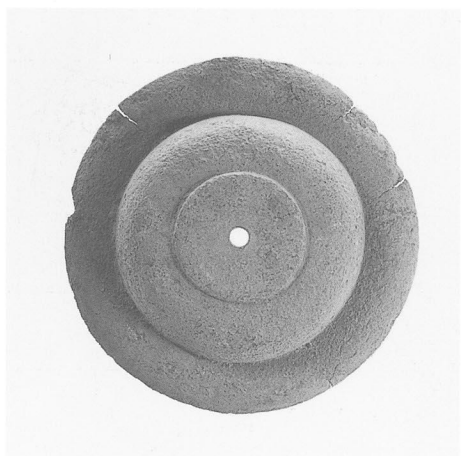
①教塚遺跡出土経筒蓋①正面



④教塚遺跡出土経筒片蓋②正面



⑦教塚遺跡出土経筒台座部正面



②教塚遺跡出土経筒片蓋①表面



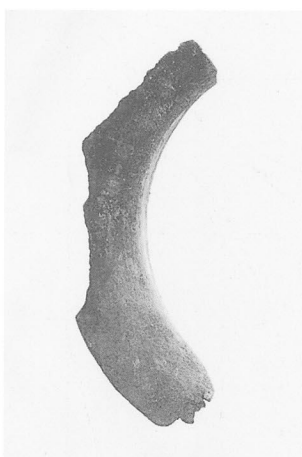
⑤教塚遺跡出土経筒片蓋②表面



⑧教塚遺跡出土経筒台座部表面



③教塚遺跡出土経筒蓋①裏面



⑥教塚遺跡出土経筒片蓋②裏面



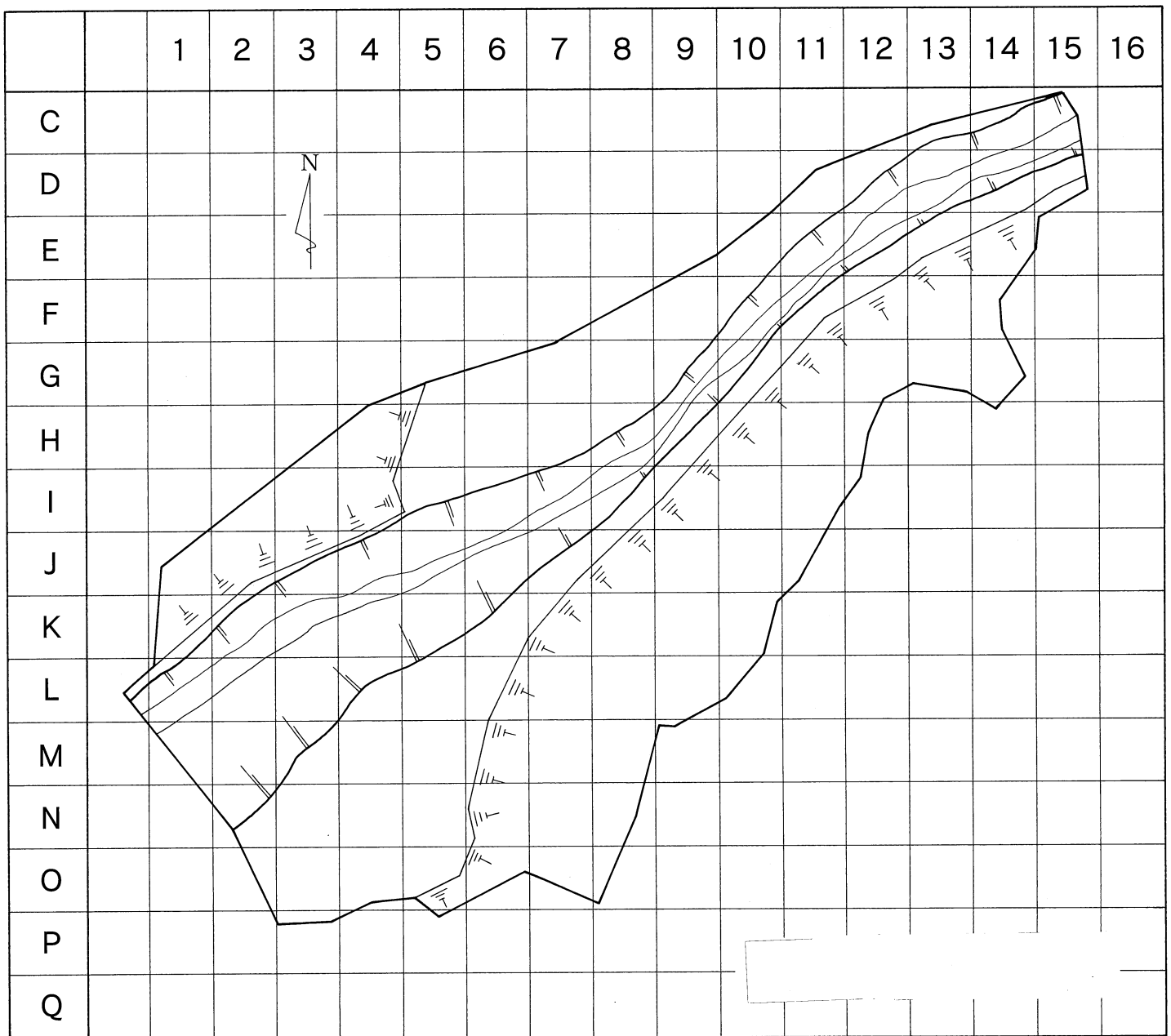
⑨教塚遺跡出土経筒台座部裏面

第三章 枋屋遺跡の調査

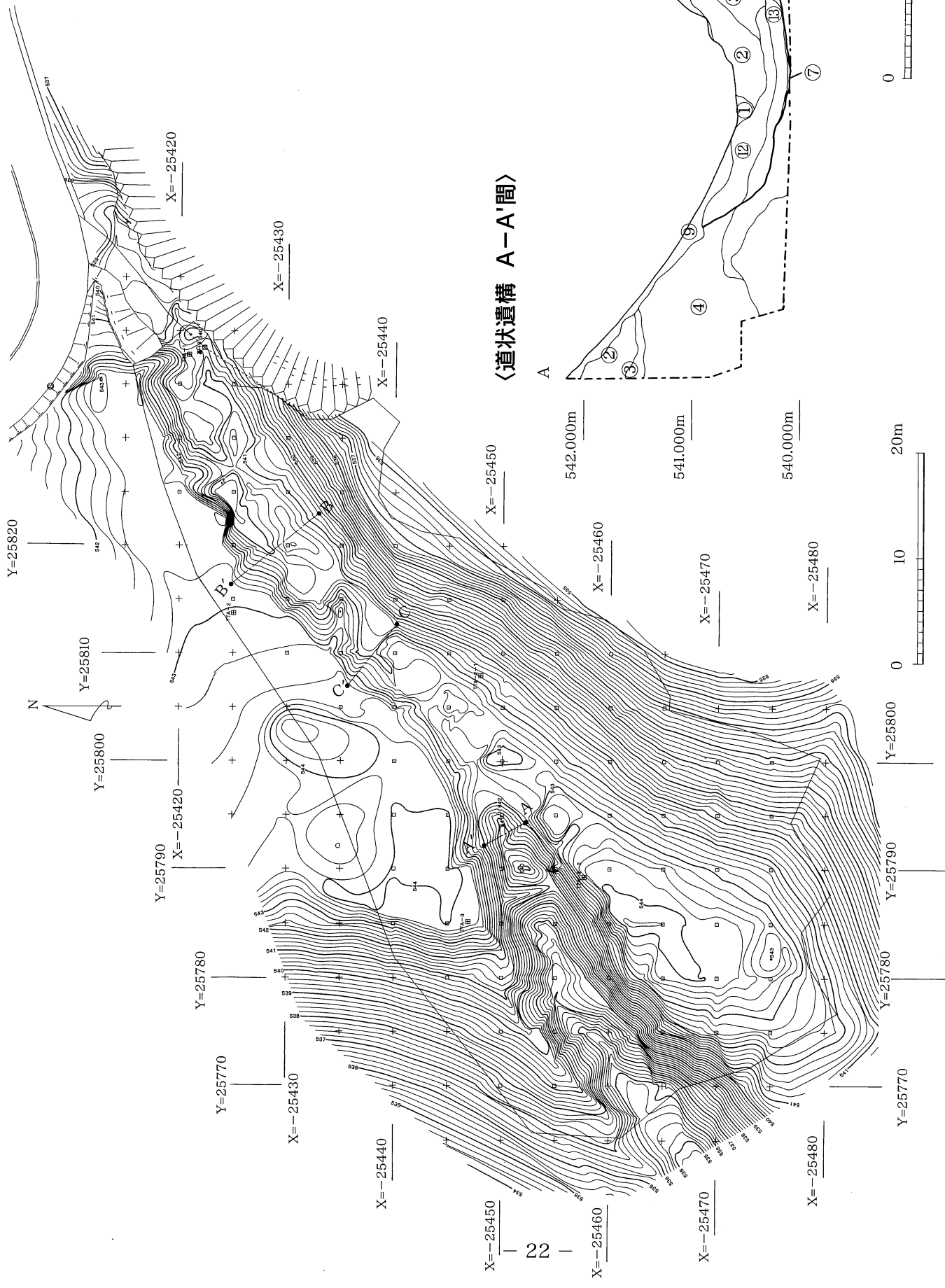
第1節 調査の経過

遺跡の所在地は、西白杵郡高千穂町大字河内字枋屋である。教塚遺跡同様、赤川浦岳（1,232m）から南西方向に派生する標高約530mの斜面上に位置する。調査対象面積は2,300㎡である。調査区は、長さ90m・幅10～50m、南西に向かって撥形に開く形であり、調査区中央に調査区を東西に横断する形で道状遺構が確認された。

調査前、北側が畑作地、南側が竹と杉に覆われた藪であったために、調査は、草木の伐採から開始した。伐採後、トレンチを合計7カ所設置して、遺構・遺物の確認を行った。人力によるトレンチ掘り下げの結果、道状遺構以外の遺構・遺物は検出されなかったため、調査区地形及び道状遺構の記録を行い、平成12年10月に調査を終了した。



第12図 枋屋遺跡 グリッド配置図 (1/500)

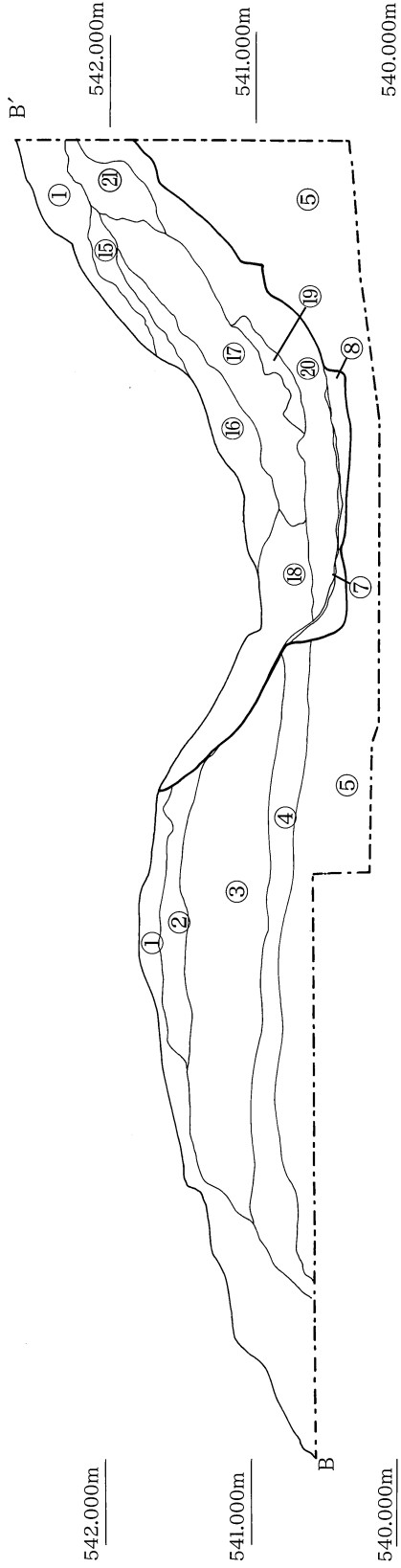


〈道状遺構 A-A'間〉

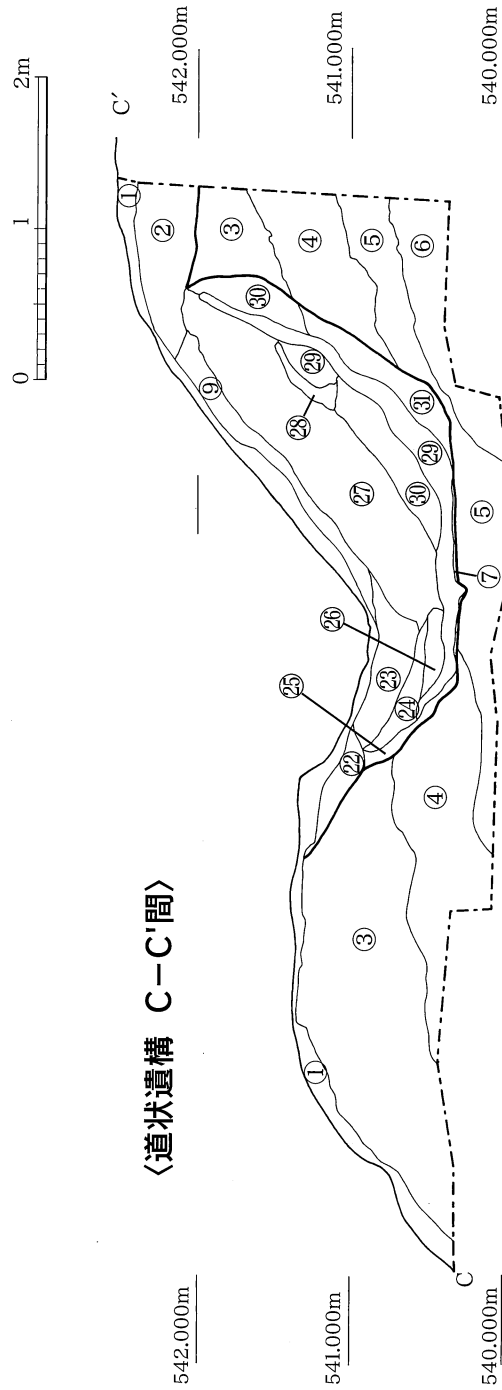
第13図 柵屋遺跡 地形測量図 (1/500) 及び道状遺構土層断面図① (1/50)

543.000m

〈道状遺構 B-B'間〉



〈道状遺構 C-C'間〉



【栢屋遺跡 道状遺構土層注記】

- ①暗褐色土(Hue 10YR3/4)…表土/②黄褐色土(1)(Hue 10YR4/6)…耕作土であると考えられる。③褐色土(1)(Hue 10YR4/4)…径1mm程度の小礫をわずかに含む。④褐色土(2) (Hue 7.5YR4/4)…③層同様径1mm程度の小礫をわずかに含むが、やや赤みがかかった色調である。⑤橙色土(Hue 7.5YR7/6)…土質はしまりが強く粘性がわずかにある。径1mm前後の小礫をわずかに含む。⑥にぶい黄褐色土(Hue 10YR5/4)…径1mm前後の小礫をわずかに含む。
- ⑦暗褐色土(Hue10YR3/3)…土質は非常硬く粘性がある。硬化面であると考えられる。⑧褐色土(Hue 10YR4/4)…土質は硬く粘性がある。⑦層と似ているが若干粘性が高く軟らかめである。

⑨褐色土(Hue 10YR4/4)…しまりなくボロボロしている。全体的に褐～暗褐色系の色調・しまりのなく、粘性を僅かにもつ土質・含有物は殆ど含まないのを特徴とする。

耕作土の流入土であると考られている。⑩～⑳は流入土である。⑩～⑳は流入土である。⑩～⑳は流入土である。⑩～⑳は流入土である。

第14図 栢屋遺跡 道状遺構土層断面図② (1/50)

第2節 調査の記録

調査の結果、調査区を南西―北東方向に横断する全長90mの道状遺構が1条検出された。調査前では深さ約150cm・断面逆三角形であったが、トレンチ掘り下げによる調査の結果、深さ約200～230cmの箱堀状の掘り込みがあることがわかった。掘り込み底部は、幅150～200cm・厚さ1～2cm程度の暗褐色の硬化面をもち（第14図）、道路としての機能が想定される。形態等の特徴を考えると、城の横堀を道として使用していたのでは、という疑問も生じる。

枳屋遺跡は、調査当初、馬見原（マンバル）城跡関連遺跡との見方があった。馬見原城に直接関連する文献は存在しないが、『日州高千穂古今治乱記』（文献-2）には、文禄3年（1595年）高橋元種の亀頭山城（高千穂町大字河内：第II章 第1図-27）攻略時に、守勢の甲斐（大神）将監惟房が18カ所に設けた砦跡の一つに「馬見原口」という記述がある。しかし、調査の結果、枳屋遺跡では、城跡や砦跡に直接関連付けることのできる遺構・遺物は道状遺構以外には確認されなかった。

『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II』（文献-3）や『高千穂村々探訪』（文献-4）などの記述において、馬見原城（砦）跡は、枳屋遺跡と異なる場所に比定しており、違う場所にあった可能性が強い。また、『日向地誌』（文献-5）によると、残念ながら今のところ比定できていないが、田原村の飛地として川内村（現在の高千穂町大字河内）に「馬見原」という字名が存在する。『日向地誌』の記述には、遺跡の所在する字名「枳屋」もあり、「馬見原」と異なる可能性が強い。

『高千穂町史』（文献-1）などによれば、遺跡から西へ1km程の場所に、江戸時代延岡藩が日向・豊後・肥後の国境に設営した河内御番所（第I章 第1図-31）がある。枳屋遺跡の道状遺構は、現在の国道325号線を迂回するような形で河内御番所に向かって延びており、当時の道だと考えられる。

【引用参考文献】

文献1：高千穂町 1973 『高千穂町史』

文献2：『日州高千穂古今治乱記』

文献3：宮崎県教育委員会・南九州城郭談話会 1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II』

文献4：甲斐岷常 1992 『高千穂村々探訪』

文献5：平部嶺南 1929 『日向地誌』日向地誌刊行會



① 柘屋遺跡と遠景（東北東方面を望む）



① 柝屋遺跡全景（上から）



① 柵屋遺跡と遠景



② 柵屋遺跡道状遺構-1 (西側から)



③ 柵屋遺跡道状遺構-2 (東側から)



④ 柵屋遺跡道状遺構-3 (東側から)



⑤ 柵屋遺跡トレンチ1 土層断面図



⑥ 柵屋遺跡トレンチ2 土層断面図

第IV章 大郎遺跡の調査

第1節 調査の経過

先行して行われた確認調査の結果、調査区内では耕作土及び小礫を多く含む客土の下から縄文時代晩期の深鉢等が出土し当該期の遺構・遺物の存在が確認された。そこで本調査ではこれらの客土を除去し、その下層に位置する鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）堆積層の漸移層に相当する黒褐色土層上面での遺構・遺物の検出を目指した。しかし、調査にあたっては客土造成により構築された2段の水田を削平する必要が生じたため、排土搬出のための仮設道路を設置した後に、重機により造成土および表土の除去作業を行うことにした。

平成13年6月5～6日にかけて、調査対象となる範囲にトレンチを設定し土層の堆積状況を確認する。その結果、第18図の宅地跡（A）では遺物・遺構ともに確認できなかった。また、竹林（B）についても伐採後の確認で土石流の流路であることが判明したために、ともに調査区から除外した。

8月10日に仮設道路工事を完了し、本格的に排土の搬出を開始した。並行して調査区の東半分については人力で表土除去を行い斜面の精査を行った。その結果、ごく浅いレベルで黄褐色粘質土（地山層）が検出され耕作による地形の改変が著しいことが判明した。旧地形の確認には至らなかったが、地山層を検出するレベルまで掘り下げ、混在する遺物の収集に努めた。

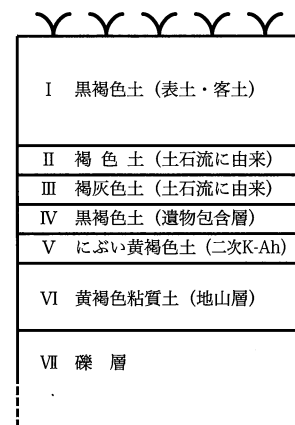
9月からは、水田が造成されていた範囲の調査に移行した。予想以上に包含層の残りはよかったものの縄文時代晩期の遺構・遺物検出面では、土石流に起因する破碎した大小の礫が散乱した状態で検出され、斜面の平均斜度は14°近くになった。そのため、遺物も土石とともに転がったり、下敷きになったりして破碎し小片になった状態で出土したものが多かった。その後も遺構・遺物の検出作業を進めた結果、包含層中の遺物数は減少したが、複数のピットおよび大小の方形のじみを3か所で確認するに至った。その後の調査で方形のじみについては堅穴住居跡であることが判明したが、遺構内から出土した遺物は流入した土石と混在しており、調査区外から土石流とともに流入した可能性が高く、確実に遺構に伴うものであると断定できる遺物は少なかった。

その後、良好な堆積を確認できた鬼界アカホヤ火山灰層の下層まで掘り下げ文化層の有無を確認したが、大小の礫及び黄褐色粘質土の堆積する地山層が検出され、期待された縄文時代早期の文化層は存在しなかった。現地における調査は、この確認作業をもって10月26日にそのすべてを終了した。

第2節 基本層序

大郎遺跡の基本層序を第15図に示した。

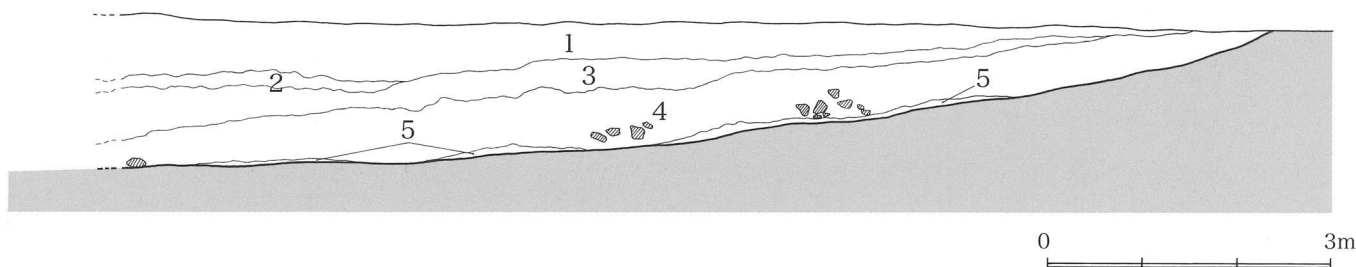
第I層は表土および水田造成の際の客土である。畑となっていた調査区の東半分に約20cm程度、水田を造成した範囲には厚いところで約3m弱の堆積が認められた。畑として利用されていた調査区の東半分ではこの下層が地山層となる。この第I層には第VI層の地山層の黄褐色粘質土と礫が混在していた。また、近現代の陶磁器類もわずかに混在する。層中の上位には稲作に伴う水田基盤層が少なくとも3枚以上形成されていた。第II層お



第15図 大郎遺跡
基本層序模式図

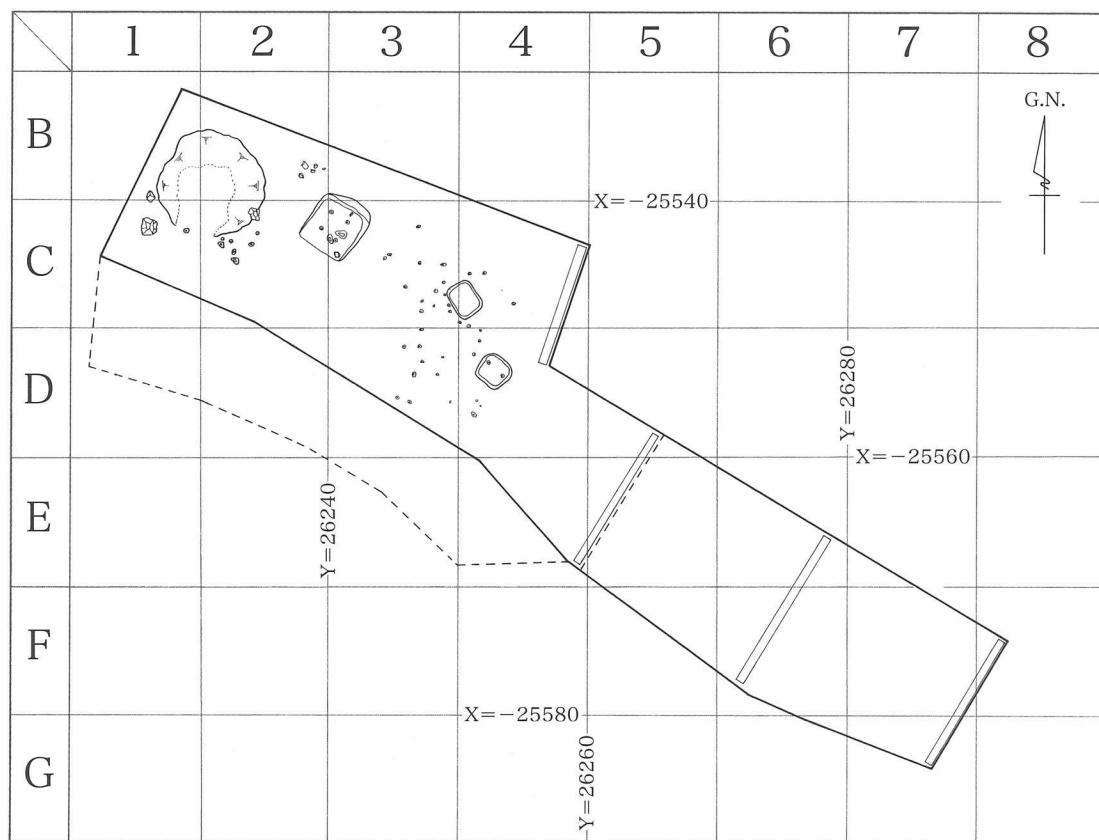
よび第Ⅲ層は土石流に伴い調査区外から流入した土石である。堆積状況は一様でなく、部分的には堆積が確認できない範囲もあった。第Ⅱ層と第Ⅲ層を合わせても70cm前後の層厚である。第Ⅳ層は黒褐色土であり、第Ⅴ層の漸移層に位置付けられる。縄文時代晩期の遺物包含層であり、土石流に伴う大小の礫がこの層中に多数含まれる。平均すると約80cm前後の層厚である。この層以下がプライマリーな堆積状況を示す。第Ⅴ層は鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層である。平均して約40cm前後の層厚であるが、本調査区内ではC1グリッド付近でしか確認できなかった。第Ⅵ層の黄褐色粘質土（平均堆積厚約80cm）およびその下層に位置する第Ⅶ層の礫層は、地山を構成する堆積層として付近の露頭でも同様の堆積状況が確認できる。

494.8m

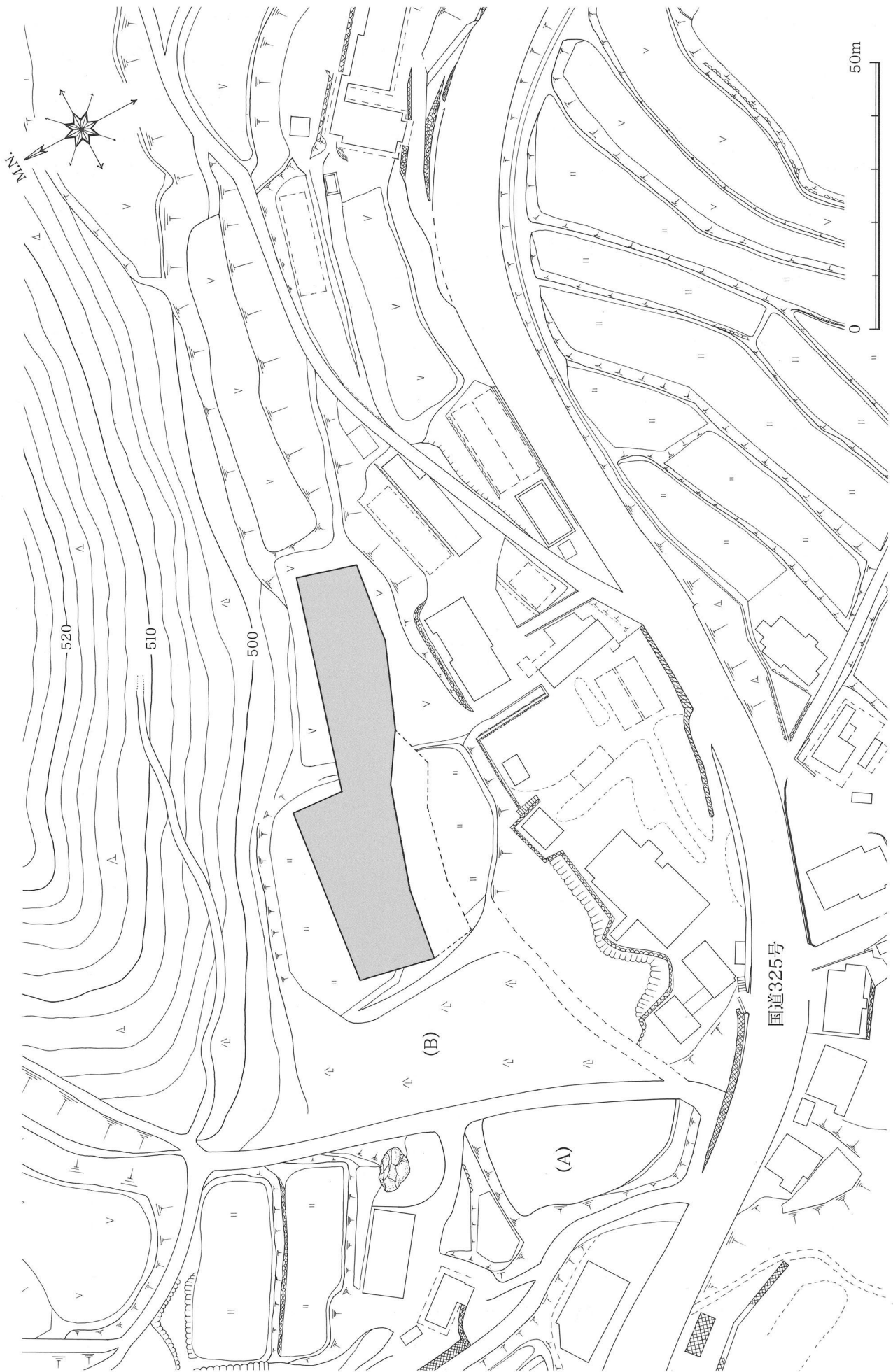


- 1 褐色土 (Hue7.5YR4/3) 混濁層で水田下の客土である。小石を多量に含む。
- 2 暗緑灰色土 (Hue10G4/1) 水田基盤層。シルト質土。鉄分・マンガン成分の沈殿が確認できる。
- 3 褐灰色土 (Hue7.5YR4/1) 混濁層で水田造成に伴う客土である。小礫を多く含む。基本層序の第Ⅲ層に相当。
- 4 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 長軸80cmを超える大礫を含む。ガラス成分を多く含む。基本層序の第Ⅳ層に相当。
- 5 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層。基本層序の第Ⅴ層に相当。

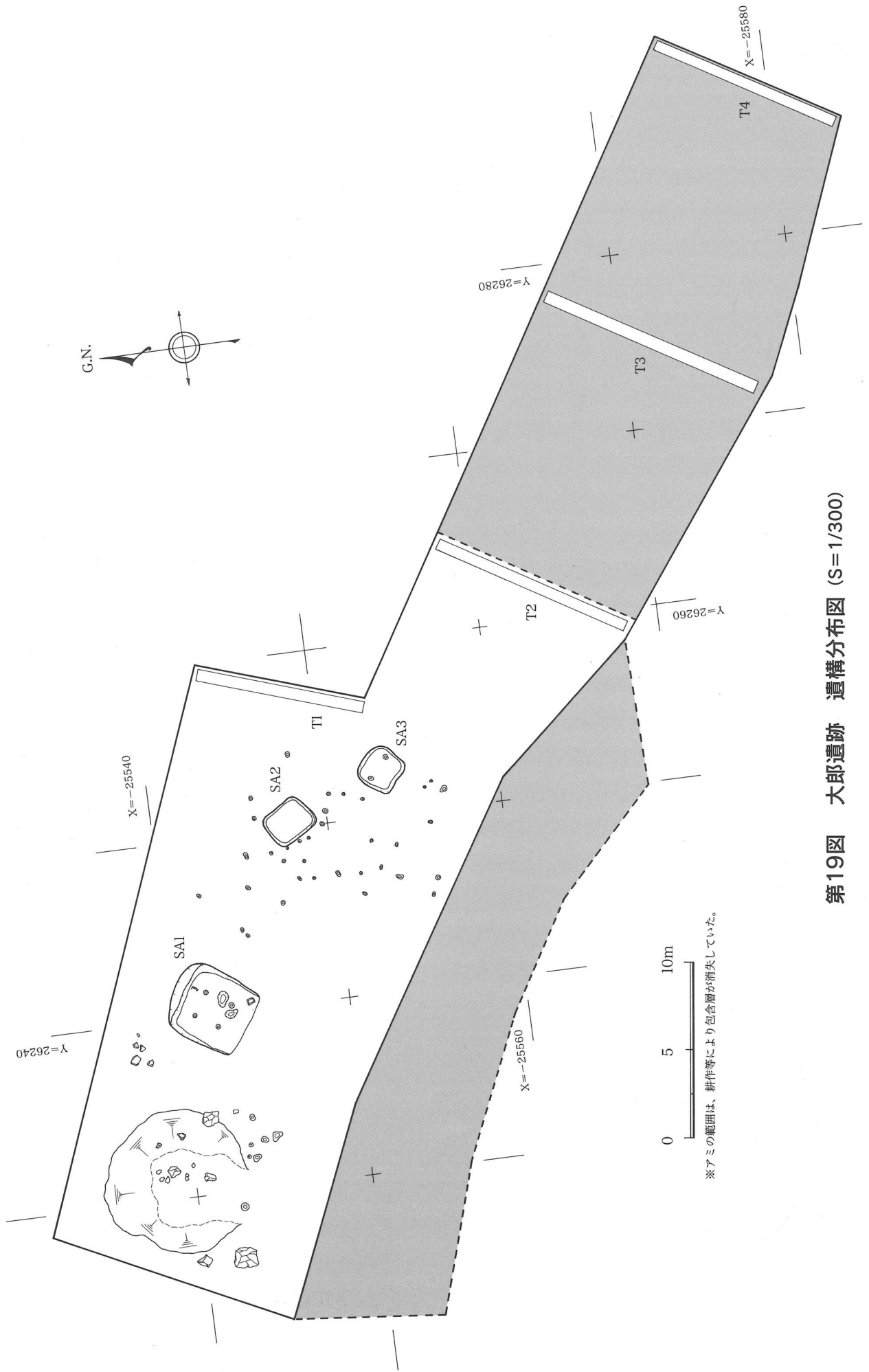
第16図 大郎遺跡 土層堆積状況図 (B2・B3グリッド付近、S=1/80)



第17図 大郎遺跡 グリッド配置図 (10mグリッド、S=1/600)



第18図 大郎遺跡 周辺地形図 (S=1/1000)



第19図 大郎遺跡 遺構分布図 (S=1/300)

※アミの範囲は、耕作等により包含層が消失していた。

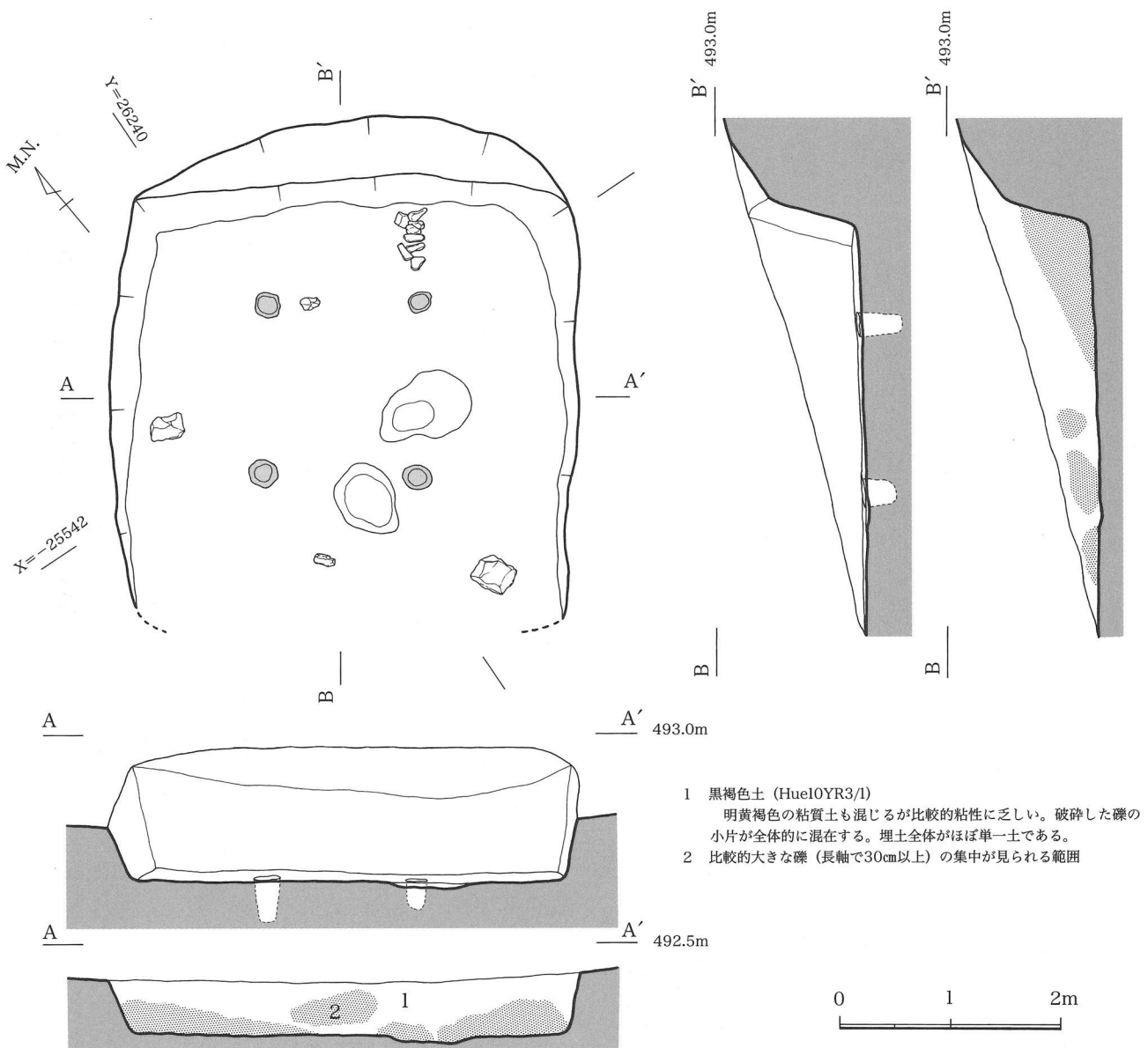
第3節 調査の記録

第IV層下位から第V層上面で竪穴住居跡3軒と42基のピットを検出した。竪穴住居跡はいずれの遺構も土石の流入が激しく、遺物は土石と混在する出土状況であった。また、土石に混じって斜面に張り付くような状態で土器片や石器等も少量ながら出土した。

1 遺構

1号竪穴住居跡 (第20図, SA1)

C2, C3グリッドにまたがり検出された方形プランを呈する住居跡である。平均斜度約15°の緩斜面を利用して掘り込まれた遺構は、検出面の上端で長軸約4.75m以上、短軸約4.22m、最深部で検出面の上端から床面まで約1.32mを測る。遺構内からは土石流により流入したと思われる長軸が50cmを超えるような破碎礫も多数検出され、埋没時の状況が推察できる (第21図)。また、床面からは、支柱



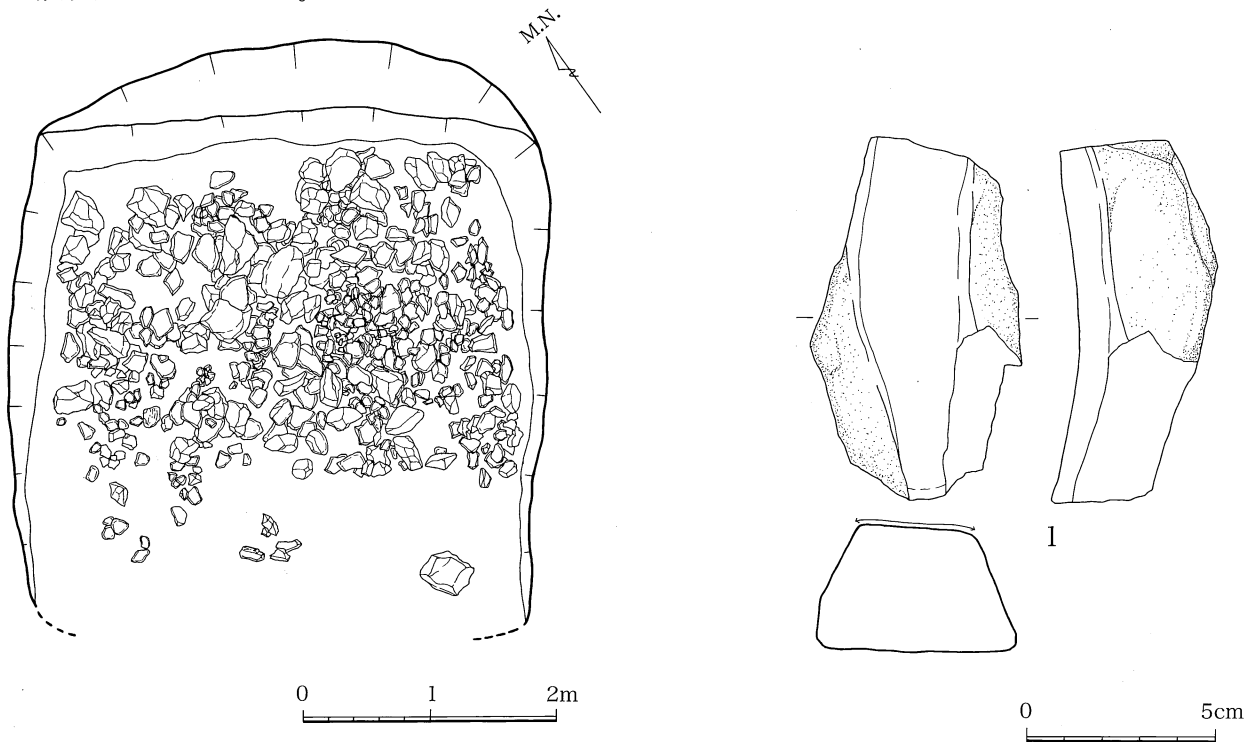
第20図 大郎遺跡 1号竪穴住居跡実測図 (S=1/60)

穴と思われるピット4基，配石遺構1基，浅い不整形な土坑状の窪み2基が検出された。

壁際で検出された配石遺構は8個の礫（亜円礫4，亜角礫1，角礫3）で構成されており、そのすべてに被熱痕跡が認められたことや配石遺構近くの側壁に若干の赤変が確認されたことから、この遺構が火を使うための遺構であった可能性を指摘することができる。また、床面で検出された2か所の浅い窪み（SC1，SC2）のうち，SC1及び近くの床面では少量の炭化物と焼土の広がりが確認できた。

この住居跡に伴う遺物として確実なものは，第21図の砂岩製砥石が1点のみであり，床面をやや掘り込み，研磨面を上にして据えられていた。その他の遺構内からの出土遺物は，検出面からおよそ15cm程度までの埋土上層に土石と共に含まれていたものである。

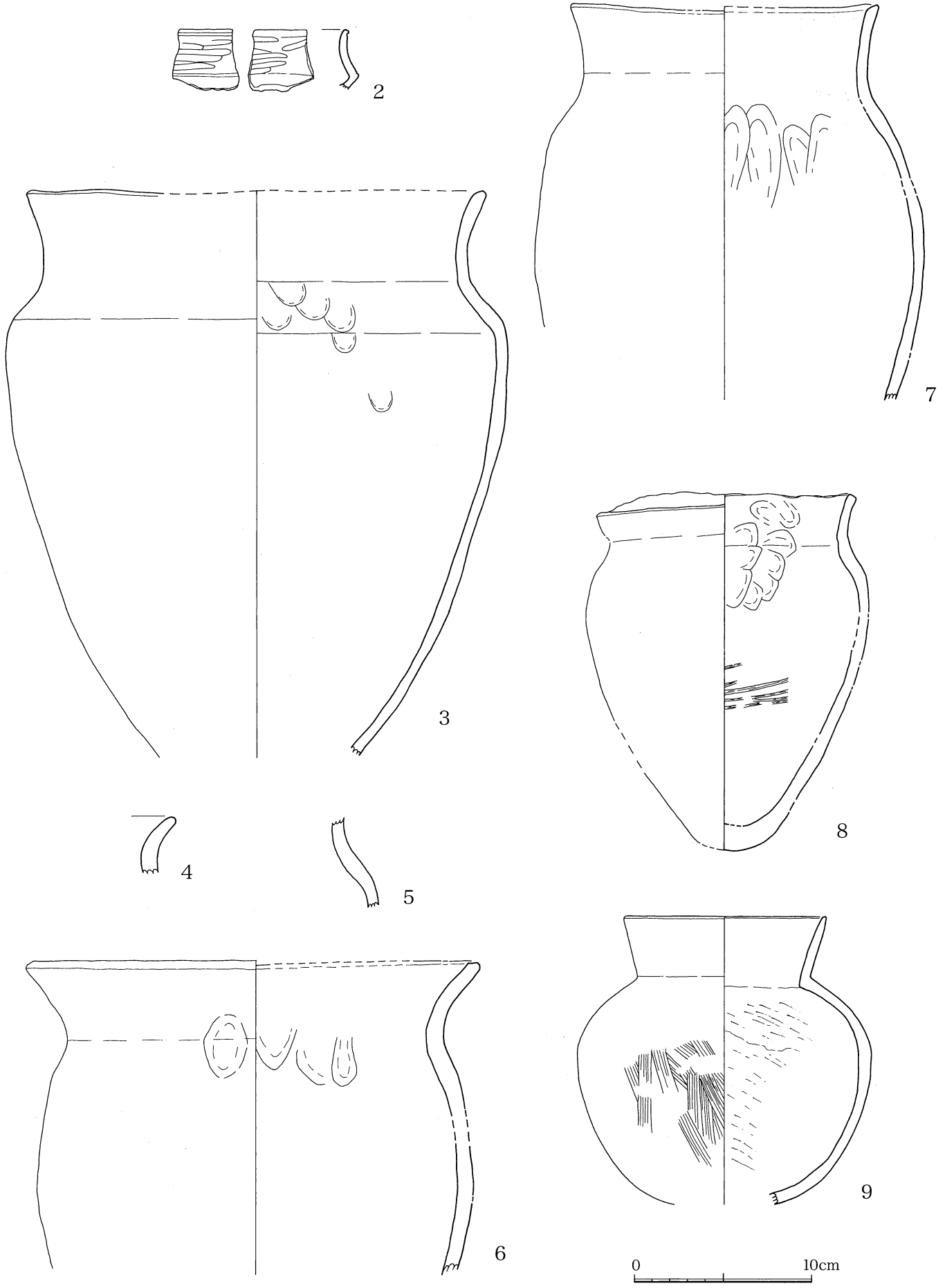
このような遺物の出土状況は，傾斜地という地形的な特性から土石流の発生を予測し事前に遺物等を持ち出したか，または流入した土石流により遺物が遺構外へと押し出され散逸したという2つの可能性を推察することができる。



第21図 大郎遺跡 1号竖穴住居跡土石流入状況 (S=1/60) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)

1号竖穴住居跡に流入した土石中に混在して出土した遺物を第22図に示した。

2は縄文土器の浅鉢である。口唇部直下と胴部から頸部への変化点直上に一条の沈線が巡る。内外面ともにミガキによる丁寧な調整が施される。3から6は弥生土器の甕である。3は口唇部から下に約8cmほどのところに胴部から頸部への変化点となる肩部が認められ，そこが胴部最大径となる。肩部の張り出しは認められるが，稜線はやや曖昧になる。4から6は緩やかなS字を描く器形である。4・5は胎土の観察から同一個体と思われる。7から9は古墳時代の土師器である。いずれも胴部中位よりやや上に胴部最大径をもつ。7の口縁部はやや立ち気味にいずれも直線的に伸びる。8は小径のレンズ状の底部をもち，胎土に5mmの小礫が多量に含まれる。9は胴部の上から1/3付近に最大径をもつ小型の甕で，口縁部にわずかな肥厚が認められる。口縁部内面にナデ，胴部内面にケズリによる調整が認められる。

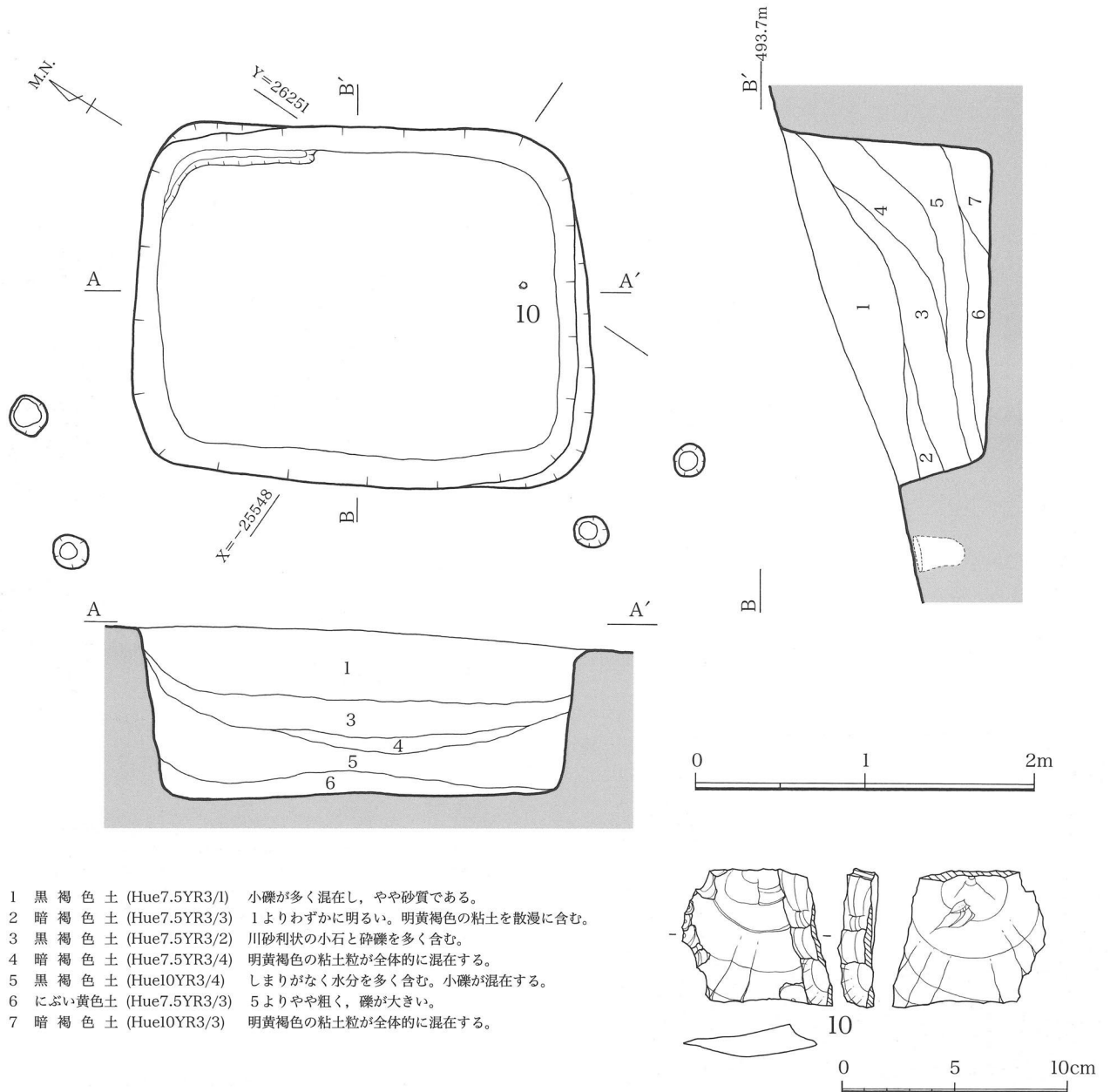


第22図 大郎遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

2号竪穴住居跡 (第23図, SA2)

C3, C4グリッドの境界付近で検出された隅丸の長方形プランを呈する住居跡である。遺構は、検出面の上端で長軸約2.72m, 短軸約2.28m, 最深部で検出面の上端から床面まで約1.28mを測る。遺構の床面からは支柱穴と思われるピットは検出できなかったが, 床面の北側の隅角で壁帯溝が検出された。また, 上端から約0.4~1mの範囲にはほぼ左右対称になる位置関係で4基のピットが検出されたが, これは住居跡の上屋構造と関連したピットである可能性を指摘しておきたい。

遺物としては, 10の青灰色のチャートのスクレイパーが床面から1点のみ出土している。



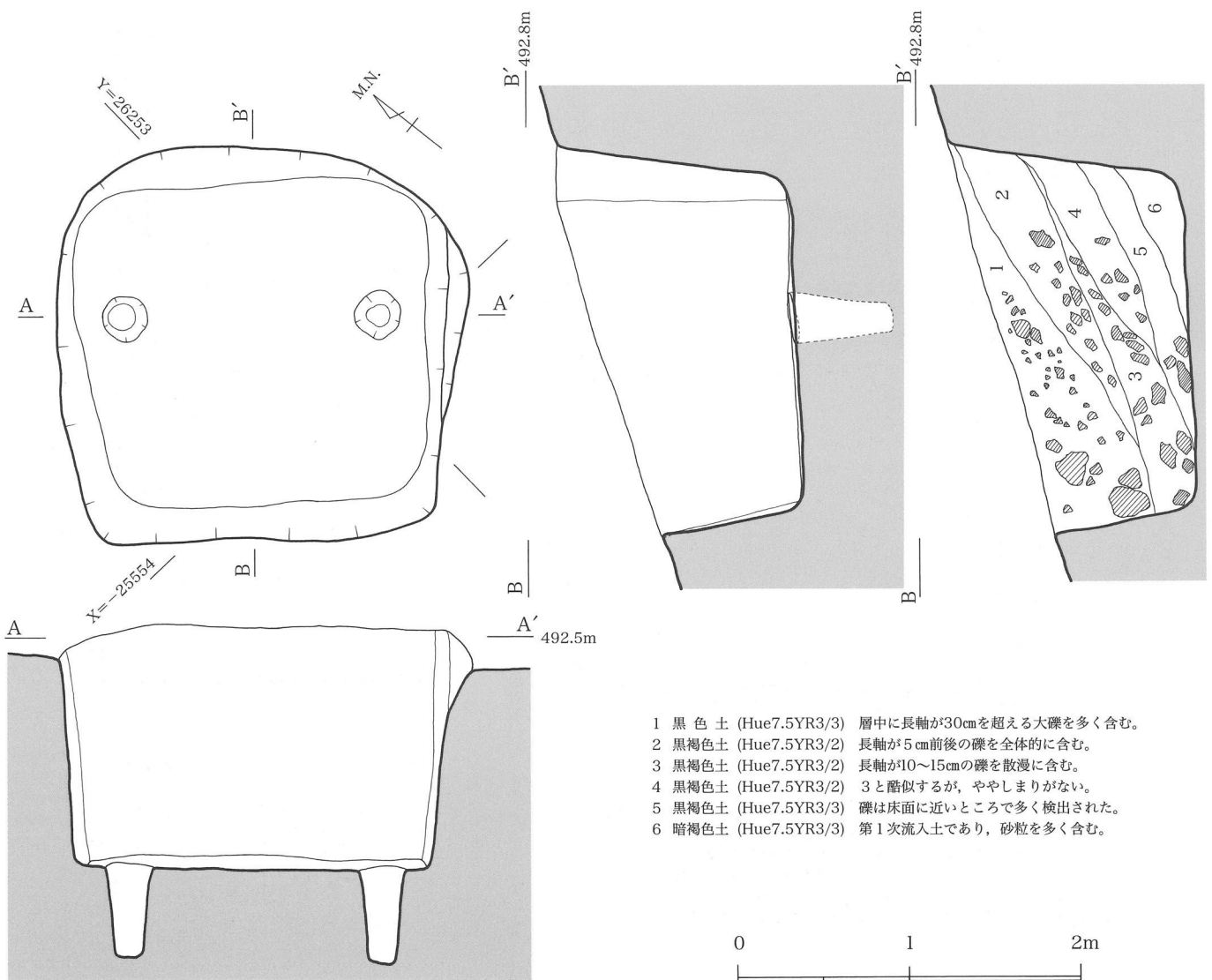
- 1 黒褐色土 (Hue7.5YR3/1) 小礫が多く混在し, やや砂質である。
- 2 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3) 1よりわずかに明るい。明黄褐色の粘土を散漫に含む。
- 3 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 川砂利状の小石と碎礫を多く含む。
- 4 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) 明黄褐色の粘土粒が全体的に混在する。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/4) しまりがなく水分を多く含む。小礫が混在する。
- 6 にぶい黄色土 (Hue7.5YR3/3) 5よりやや粗く, 礫が大きい。
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/3) 明黄褐色の粘土粒が全体的に混在する。

第23図 大郎遺跡 2号竪穴住居跡実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

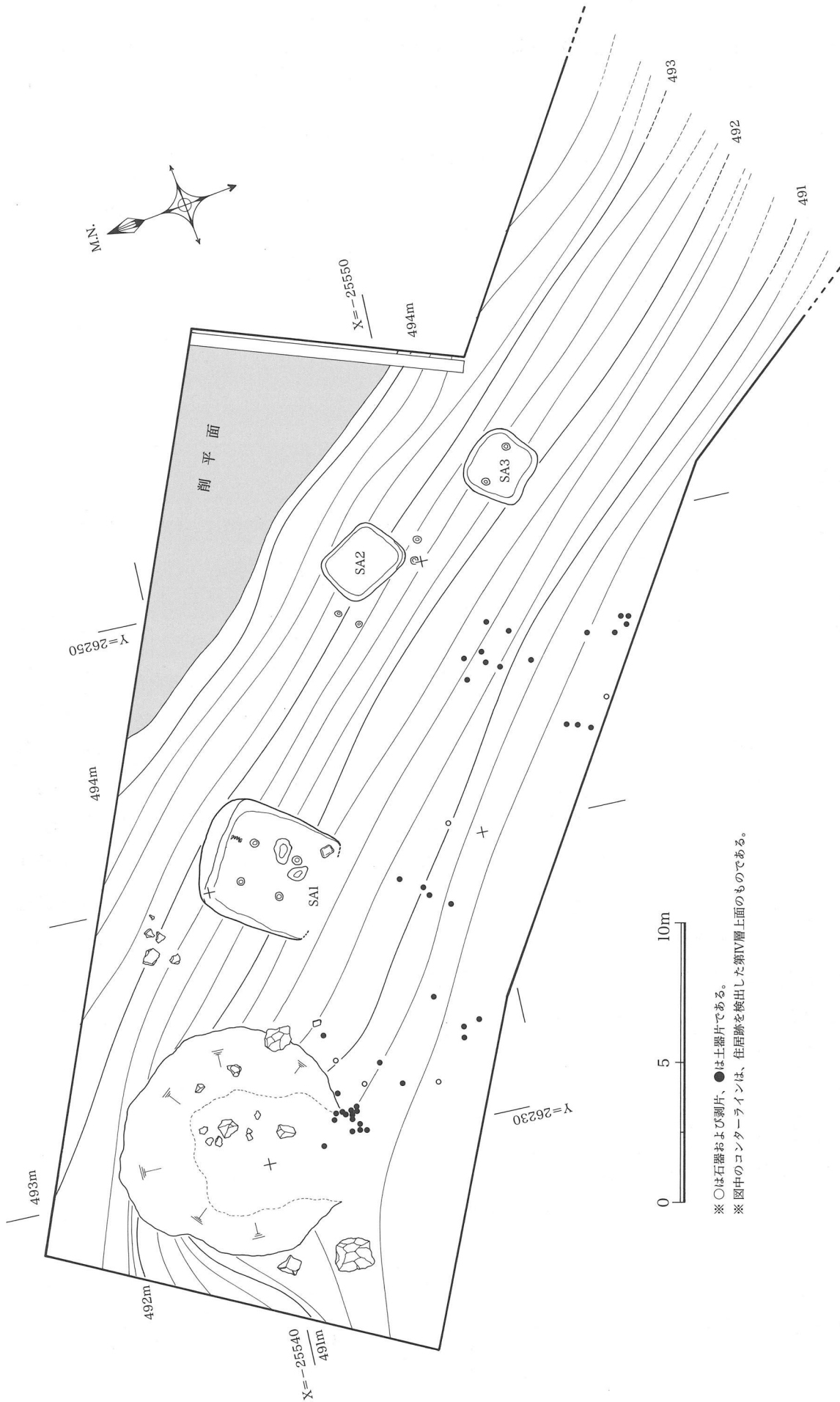
3号竪穴住居跡 (第24図, SA3)

D4グリッドで検出された住居跡であり、やや不整形であるが短軸と長軸の長さがほぼ等しい隅丸方形のプランを呈する。検出面の上端で長軸約2.38m、短軸約2.32m、最深部で検出面の上端から床面まで約1.36mを測る。遺構に伴う遺物等の出土はなかったが、硬化した床面や支柱穴と思われるピット2基、少量の炭化物等が検出されたことから竪穴住居跡と認定するに至った。

遺構内の流入土は観察の結果6層に細分できる。しかし、第1次流入土と考えられる第23図中の6層以外の1～5層については、層界は確認できるが、その組成を比較したところ特に大きな差異は認められなかった。このことから、この遺構は度重なる土石流等により、調査区周辺の大小の礫が破碎しながら大量に流れ込み、ごく短期間のうちに埋没したものと考えられる。



第24図 大郎遺跡 3号竪穴住居跡実測図 (S=1/40)



※ ○は石器および剥片、●は土器片である。
 ※ 図中のコンターラインは、住居跡を検出した第IV層上面のものである。

第25図 大郎遺跡 遺構および遺物分布図 (S=1/200)

2 遺物

遺物に伴わない遺物を第26図から第30図に示した。

(1) 縄文時代の遺物

土器 (第26～28図)

I類 (第26図 11～23)

刻目のない1条の突帯を口縁部に巡らす土器であり、いわゆる「無刻目突帯文土器」である。突帯の形状には、わずかに隆起する程度に止まるもの(11)、細かく鋭角的なもの(17)などもわずかながら含まれておりいくつかのバリエーションが存在する。

11～14は直線的もしくは緩やかに外反する器形を呈し、丸みを帯びた口唇部となる。15～17は直線的に内反し、水平な口唇部をもつ。18・19は同じく直線的に内反するが、丸みを帯びた口唇部をもつタイプである。20～23は直線的に内反したのち口縁部付近で外反し、丸みを帯びた口唇部となる。22・23の張り出しはシャープな稜を有し、明瞭な屈曲を生み出している。18・21には穿孔が認められる。

II類 (第26図 24, 25)

緩やかに外方に開きながら直線的に立ち上がる器形を呈する。口唇部は24では丸みを帯びるが、25では外方に向かいわずかな屈曲が認められる。

III類 (第27図 26～40)

外方に向かい開く幅の広い口縁部と、胴部の最大径で明瞭な稜を有し屈曲する器形を特徴とする。また、器表面に密に施されるミガキも特徴的な磨研土器の一群である。26～30はいずれも口唇部直下の内面または外面に1条の沈線が施される。26・27は口唇部が水平で若干内側に突出する。27には内外面から焼成後の穿孔が認められる。29は緩やかに外反する頸部と口縁端部の外反が特徴的であり、口唇部直下に内面から施された1条の沈線により口縁端部断面形は玉縁状を呈する。28・30は口唇部直下の内面または外面に1条の弱い沈線が認められる。31は胴部から口縁部への変化点に明瞭な稜を有し、口縁部は弧を描くように屈曲しながら立ち上がる器形を呈する。口唇部は尖り気味になり、口唇部直下の沈線は認められない。器表面の風化が著しく判然としないものの、部分的に残っている器表面の調整を観察するとミガキの調整が施されていたものと考えられる。33～40は胴部片である。33は胴部の張り出しと頸部の変化点の間に2条の沈線を有する。内外面ともにミガキが顕著である。34, 35は胴部の張り出し部である。35には1条の沈線が認められる。36～40は張り出し部から下位の胴部片である。

IV類 (第27図 41)

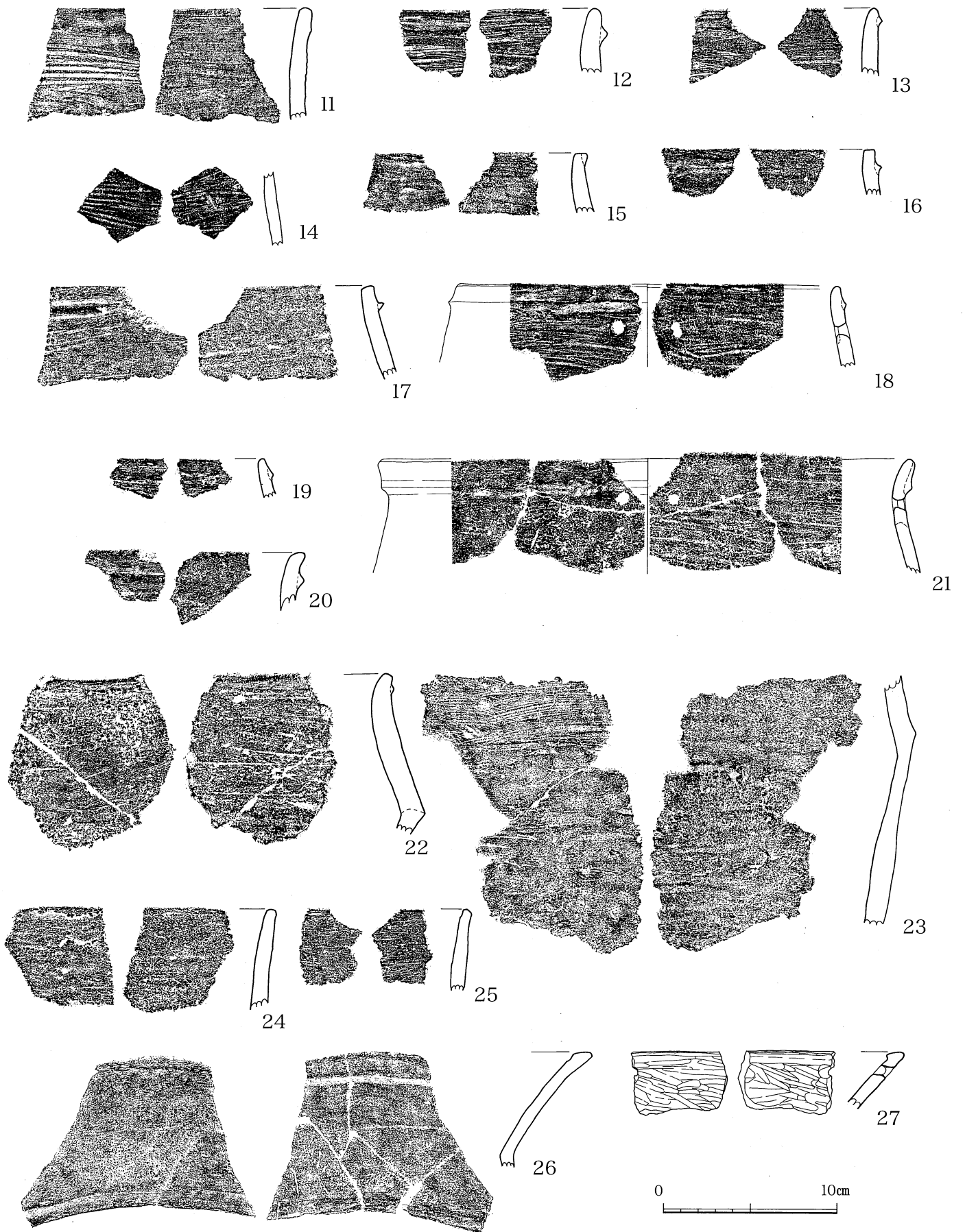
頸部が簡略化された短頸の浅鉢である。口唇部から器表の内外面に密なミガキが施されている。

V類 (第27図 42)

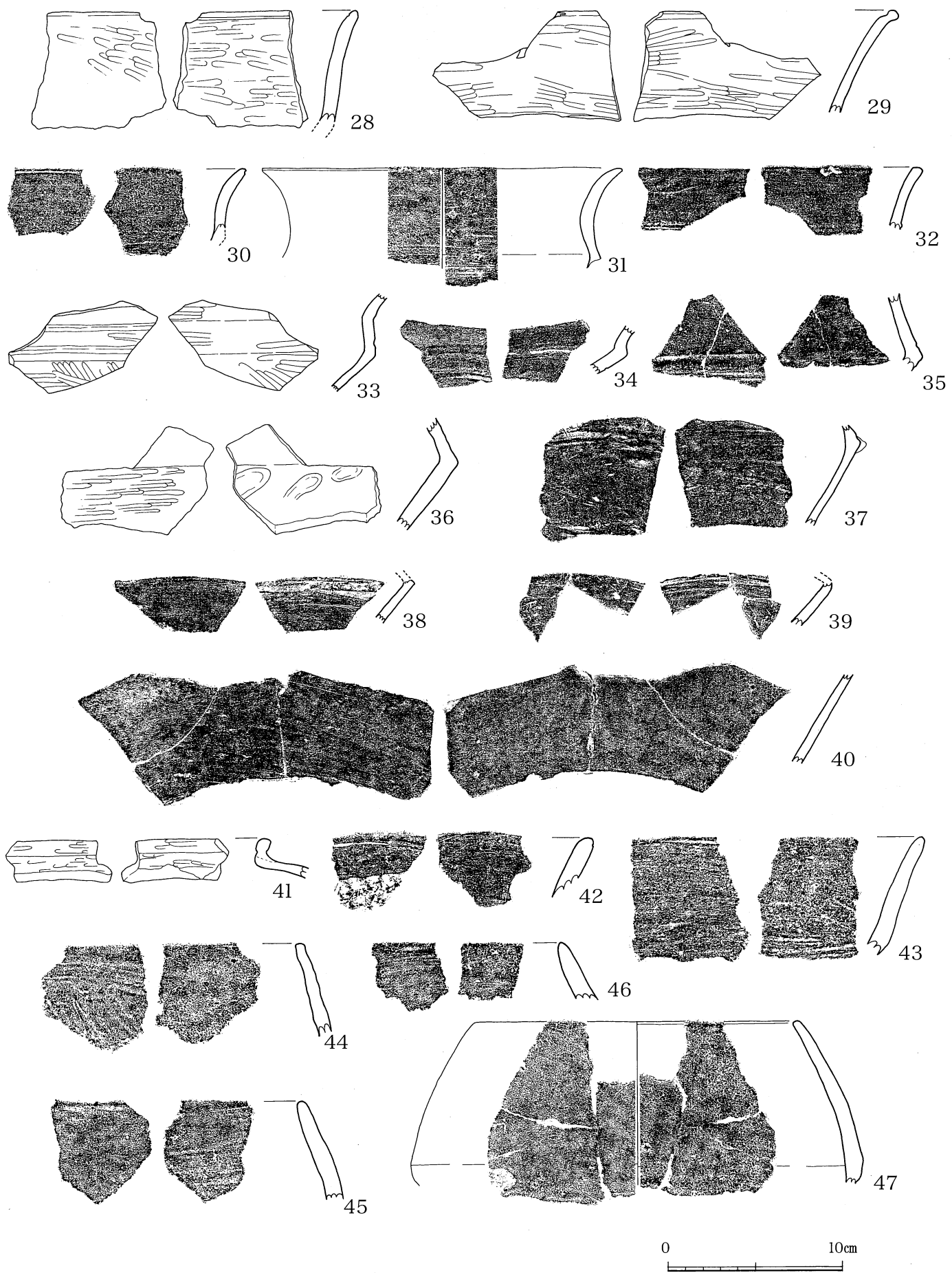
底部から外方に向かい直線的に開く鉢状の器形を呈すると思われる。口縁部外面には弱い1条の沈線が施され、口唇部は丸く仕上げられている。

VI類 (第27図 43)

底部から屈曲した外方に向かい立ち上がる器形を呈する。口縁部外面に1条の曖昧な沈線が認められる。内外面ともに貝殻腹縁による条痕が顕著である。



第26図 大郎遺跡 出土遺物実測図1 (S=1/3)



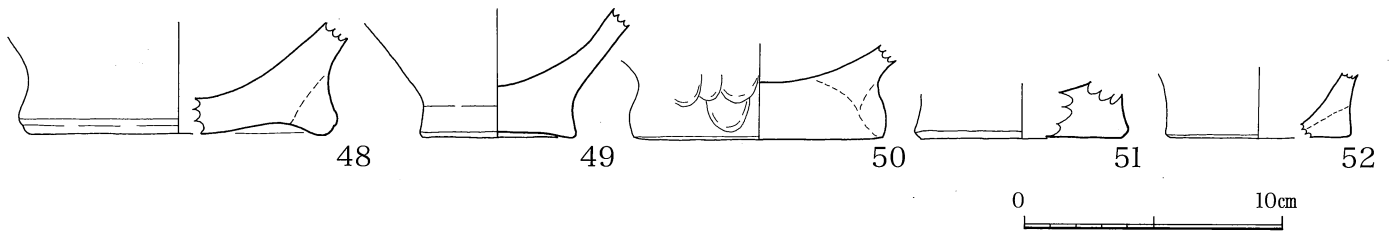
第27图 大郎遺跡 出土遺物実測図2 (S=1/3)

Ⅶ類 (第27図 44~47)

底部からやや内湾気味に屈曲しながら立ち上がる器形を呈するが、施文等は認められない。

Ⅷ類 (第28図 48~52)

底部の一括資料を第28図に示した。48・49は上げ底の底部である。48の側面下位には1条の沈線が施されその上部がわずかに突出する。底部外面の側縁では上げ底が顕著であるが、中央部付近ではやや下がり気味である。内外面ともにナデによる丁寧な調整が施されている。50~52は平底の底部である。50は底部側面のわずかなふくらみが特徴的である。

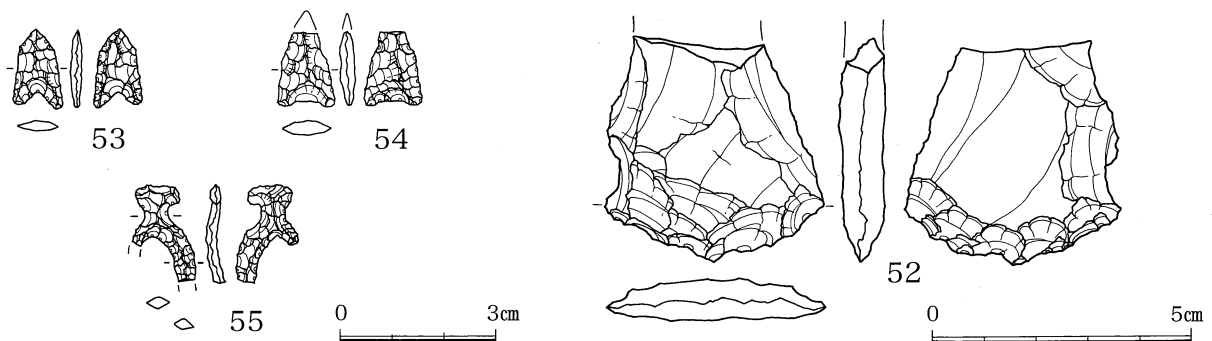


第28図 大郎遺跡 出土遺物実測図3 (S=1/3)

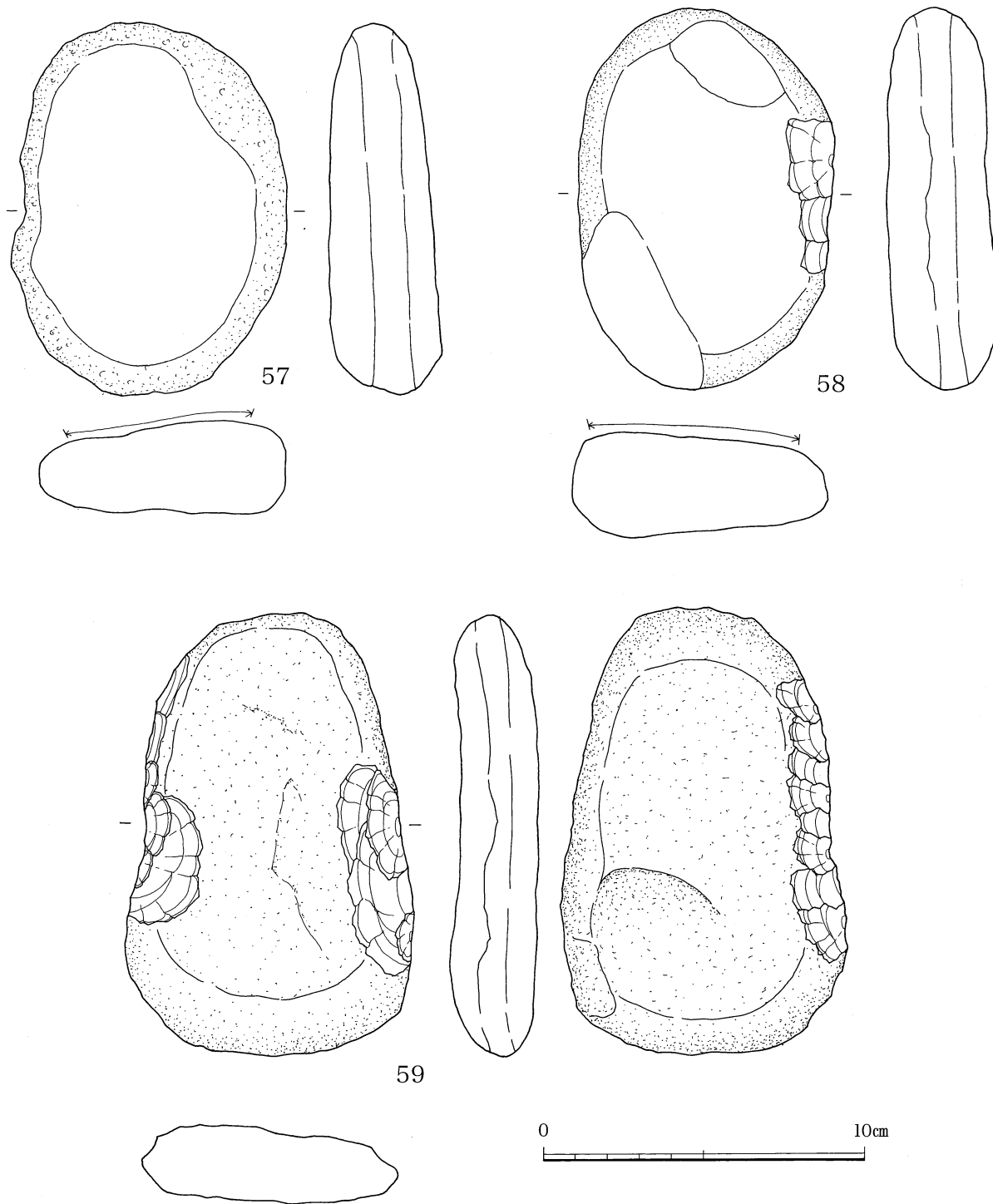
石器 (第29図・第30図)

大郎遺跡で出土した石器9点のうち、遺構に伴わずに出土したものは7点である。

53・54は打製石鏃である。53は浅い抉れを有する凹基の打製石鏃であり、尖端部付近に張り出しが認められ砲弾状の平面形態を呈する。石材として大分県の姫島産黒曜石を使用している。54は平面形態が二等辺三角形に近い平基の打製石鏃である。尖端部が欠損している。55は熊本県の西小国産の黒曜石を石材とする異形石器であり、音叉状の平面形態を呈する。細部にわたり細かな調整が認められ、側面形態はやや彎曲している。両脚部が欠損している。56はスクレイパーである。先端部にのみ調整が認められ、端部は欠損している。57・58は磨石である。ともに片面のみに磨り面が確認でき、58の側面には打ち欠いた跡も認められる。また、磨り面が3面見られることは、角度を付けて使用したことによるもので対象物や目的により意図的に使い分けたことも考えられる。59は両側面からの打ち欠きにより、両側面がやや抉れた形状を作出しており石錘と考えられる。



第29図 大郎遺跡 出土遺物実測図4 (S=2/3)



第30図 大郎遺跡 出土遺物実測図5 (S=1/2)

第1表 大郎遺跡 出土石器計測表

遺物番号	位置・層位		器種	計測値				石 材	備 考
				最大値(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)		
1	SA1	床 面	砥 石	18.76	11.07	8.42	1898.8	砂岩	
10	SA2	床 面	スクレイパー	3.98	4.49	1.08	18.4	チャート	
53	包含層	II 層	打製石鏃	2.02	1.29	3.12	0.6	黒曜石(姫島)	
54	包含層	II 層	打製石鏃	1.95	1.49	3.84	1.1	ホルンフェルス	先端部欠損
55	包含層	IV 層	異形石器	2.45	1.95	3.32	0.9	黒曜石(西小国)	一部欠損
56	包含層	IV 層	スクレイパー	5.63	5.59	1.09	44.3	ホルンフェルス	
57	包含層	IV 層	磨 石	11.62	8.39	3.46	474.2	安山岩	
58	包含層	IV 層	磨 石	11.81	7.85	3.25	409.3	砂岩	
59	包含層	II 層	石 錘	13.86	8.81	6.52	411.9	砂岩	

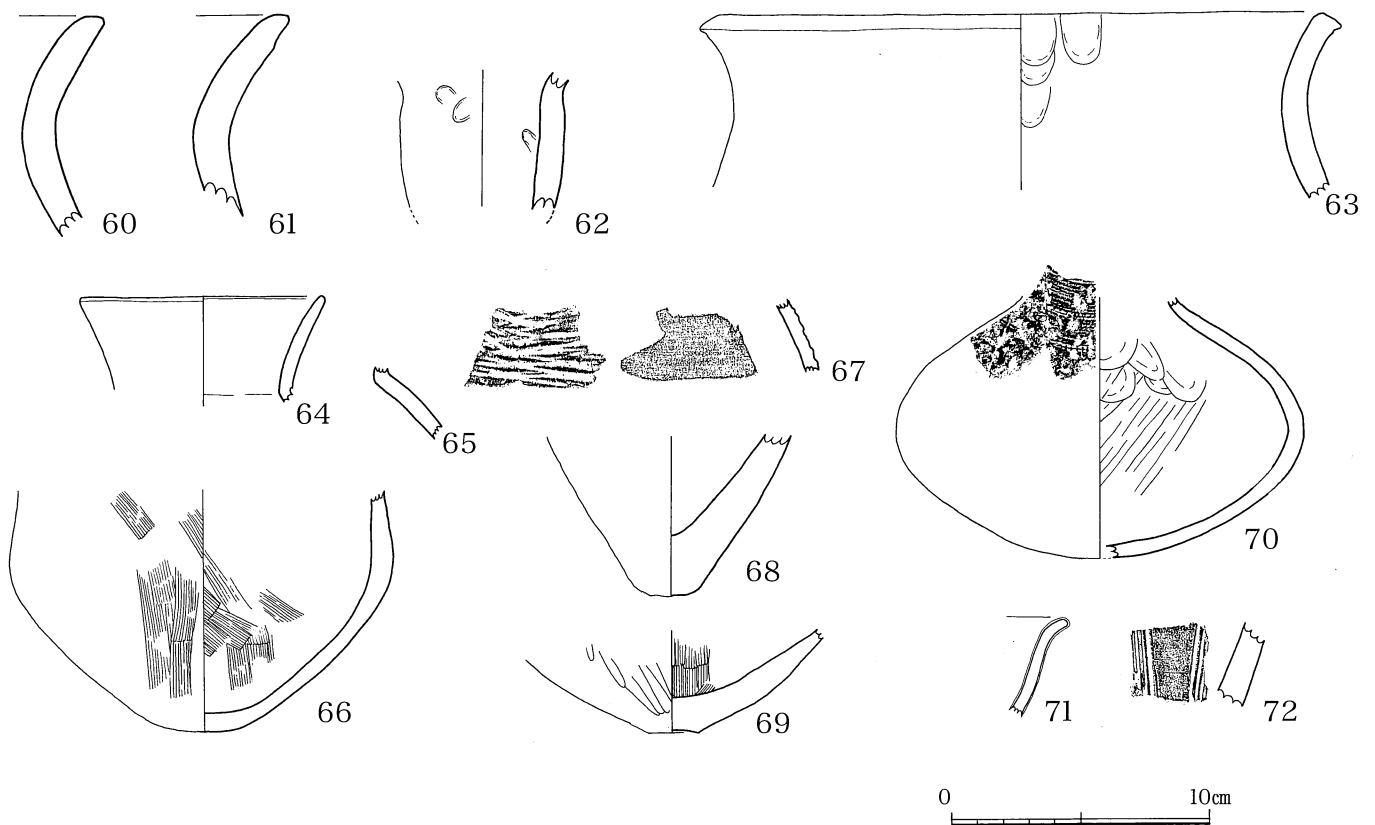
(2) その他の時代の遺物

縄文時代以外の時代に帰属する遺物を第31図に示した。

60から62は弥生土器の甕である。60・61は口縁部から胴部へとS字カーブを描きながら緩やかに変化する器形を呈する。口唇部はともにヨコナデにより平滑になる。62は小型の甕の胴部である。

63から69は古墳時代の土師器である。63はS A 1の埋土中から出土した7と調整や胎土の特徴が近似しているが、7に比べて口縁部の外反が強い。64と65は1号竪穴住居跡に流入した土石中から出土した9と同じタイプの小型の甕である。66は9とほぼ同じ器形の小型の甕であるが、最大幅の位置が胴部の中位にある。また、内面にはケズリではなく板状工具による調整が見られる。67は薄手の甕の胴部片と思われる。外器面には、概ね横位ではあるがその方向を一にしない粗いタタキの痕を明瞭に残す。68と69は底部片である。68は1円玉ほどの大きさの底部で尖底気味の器形を呈する。器表面は風化が激しく調整が不明瞭であるが、下から上への削り上げによるものと考えられる。69は68と同じほどの大きさの小さな上げ底の底部から外方に向かい緩やかに立ち上がる器形を呈する。外器面にはやや風化気味であるがミガキの調整痕が見られ、内器面にはハケ目が明瞭に残る。70は算盤玉状に張り出した胴部と胴部上位の押し引きによる施文を特徴とする長頸壺であり、張り出しの明瞭な稜線や重弧文は認められないものの免田式土器の範疇に収まるものである。

71と72は陶磁器である。71は口縁部が外反する龍泉窯系青磁の端反碗である。72は備前焼の挿鉢である。櫛描きの条線が残るが小片のため単位は不詳である。



第31図 大郎遺跡 出土遺物実測図6 (S=1/3)

第2表 大郎遺跡 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	層位・位置	法重 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
2	縄文土器	浅鉢 口縁部~胴部	SA1	—	—	—	横方向のミガキ 沈線	横方向のミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の赤褐色粒 1mm以下の角閃石・石英粒	
3	弥生土器	壺 口縁部~胴部	SA1	25.3	—	—	丁寧なナデ ナデ ヨコナデ	ナデ 黒変 指押さえ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3mm以下の黒色・透明光沢粒 2mm以下の褐色・乳白色粒	
4	弥生土器	口縁部	SA1	—	—	—	ヨコナデ 黒変	斜方向のナデ	黒褐	暗赤褐	1mm以下の角閃石・石英粒	
5	弥生土器	胴部	SA1	—	—	—	ナデ 黒変	ナデ	灰褐	褐	2mm以下の角閃石・石英粒 1mm以下の褐色・黄灰色粒	
6	弥生土器	壺 口縁部~胴部	SA1	25.5	—	—	横・縦方向のナデ 指押さえ	ナデ 指押さえ	黒褐 暗褐	黒褐	3mm以下の暗赤褐色粒 1~2mmにぶい褐色粒	
7	土師器	壺 口縁部~胴部	SA2	17.2	—	—	横・縦方向のナデ 保付着	ナデ 指押さえ	にぶい赤褐 にぶい赤褐	にぶい赤褐 にぶい赤褐	1~2mm大の灰褐色粒 1~2mm大の角閃石・石英粒	
8	土師器	口縁部~底部	SA1	14.6	—	20.3	ハケ目	指押さえ 粗いナデ 指押さえ	褐 にぶい黄褐色	黒	1~3mm大の灰褐色・褐色光沢粒 1mm以下の灰褐色粒	
9	土師器	壺 口縁部~胴部	SA1	11.4	—	—	ハケ目	斜方向のケズリ	明赤褐	明赤褐	4mm以下の赤褐色粒 2mm以下の茶褐色粒	
11	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	条痕 ヨコナデ	ヨコナデ 黒変	黒褐	黒褐	1mm以下の黄褐色粒 1mm以下の角閃石	
12	縄文土器	深鉢 口縁部	IV層	—	—	—	条痕 無刻目突帯	条痕	オリーブ黒	オリーブ黒	3mm以下の角閃石・石英粒 2mm以下の角閃石・黒色粒	
13	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	条痕 ヨコナデ	条痕	黒褐	黒褐	3mm以下の角閃石・石英粒 1mm以下の灰褐色粒	
14	縄文土器	深鉢 胴部	表探	—	—	—	条痕	条痕	灰黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の角閃石・石英粒	
15	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	粗いヨコナデ 無刻目突帯	条痕のあとナデ	黒褐	褐	3mm以下の灰褐色・茶褐色粒 2mm以下の角閃石	
16	縄文土器	深鉢 口縁部	III層	—	—	—	ヨコナデ 無刻目突帯	ヨコナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰白色粒 1mm以下の角閃石・石英・炭母粒	
17	縄文土器	深鉢 口縁部	III層	—	—	—	条痕のあとナデ	条痕	褐	褐	1~2mmの灰黄褐色粒 1mm以下の角閃石・石英粒	
18	縄文土器	深鉢 口縁部	表探	21.4	—	—	条痕 穿孔 無刻目突帯	横・斜方向のナデ 粗いナデ	黒褐	黒褐	2mm以下の角閃石・石英粒 2mm以下の褐色・灰黄色・灰褐色粒	
19	縄文土器	深鉢 口縁部	IV層	—	—	—	条痕 ナデ 黒変	条痕 黒変	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の角閃石・石英粒 3mm以下の茶褐色・乳白色粒	
20	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	ヨコナデ 無刻目突帯	指押さえ ヨコナデ	灰褐	赤褐	2mm以下の角閃石・石英粒 2mm以下の茶褐色粒	
21	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	30.1	—	—	丁寧なナデ 穿孔	条痕 穿孔	明褐	明褐	3mm以下の黒色・透明光沢粒 5mm以下の黄灰色・灰褐色粒	
22	縄文土器	深鉢 口縁部~胴部	II層	—	—	—	横方向の条痕 無刻目突帯	横方向の条痕	灰褐	にぶい褐	1mm以下の乳白色粒 1mm以下の角閃石	
23	縄文土器	深鉢 胴部	IV層	—	—	—	粗いナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	3mm以下の黒色・透明光沢粒 8mm以下の褐色・黄灰色・乳白色粒	
24	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	条痕のあとナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	5mm以下の褐色粒 2mm以下の黒色・黒褐色光沢粒	
25	縄文土器	深鉢 口縁部	II層	—	—	—	粗い条痕 ヨコナデ	条痕のあとナデ	灰褐	褐	2mm以下の黒色粒 1mm以下の茶褐色粒	
26	縄文土器	浅鉢 口縁部~胴部	IV層	—	—	—	ミガキ? 沈線	ミガキ?	暗褐	暗褐	2mm以下の茶褐色粒 1mm以下の角閃石	
27	縄文土器	浅鉢 口縁部	II層	—	—	—	ミガキ 穿孔	ミガキ 沈線	にぶい黄褐 橙	明黄褐 灰黄	1~2mm以下の灰白色・赤褐色粒 1mm以下の灰褐色粒	
28	縄文土器	浅鉢 口縁部~胴部	IV層	—	—	—	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ 沈線	黄灰	暗灰黄	1mm以下の角閃石・石英粒	
29	縄文土器	浅鉢 口縁部	表探	—	—	—	ミガキ	ミガキ 沈線	にぶい赤褐	赤褐	1mm以下の黒色粒 1mm以下の灰褐色粒	
30	縄文土器	浅鉢 口縁部	60	—	—	—	ヨコナデ 沈線	ヨコナデ	暗褐	暗褐	1mm以下の黒色鈍光沢粒 1mm以下の乳白色粒	
31	縄文土器	深鉢 口縁部~胴部	II層	20.3	—	—	ナデ 保付着	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	2mm以下の黒色粒 5mm以下の褐色・黄灰色粒	
32	縄文土器	浅鉢 口縁部	II層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	灰黄	1~3mmの黄褐色粒 1mm以下の褐色・茶褐色粒	
33	縄文土器	浅鉢 胴部~胴部	II層	—	—	—	ミガキ 沈線	ミガキ	暗赤褐	暗褐	1mm以下の角閃石・石英粒 2mm以下の茶褐色粒	
34	縄文土器	浅鉢 胴部~胴部	IV層	—	—	—	ミガキ 黒変	ミガキ 黒変	にぶい赤褐 黒褐	黒褐	1mm以下の明褐色粒 1mm以下の黒色粒	
35	縄文土器	浅鉢 胴部	II層	—	—	—	ミガキ ナデ	ミガキ 沈線	にぶい褐	にぶい黄褐	1mm以下の黒色・透明微細物粒	
36	縄文土器	浅鉢 胴部	II層	—	—	—	ミガキに近いナデ 沈線	条痕 ナデ	黒褐	褐 灰黄褐	1~2mm以下の黒色鈍光沢粒 1mm以下の黄褐色粒	
37	縄文土器	浅鉢 胴部	表探	—	—	—	ミガキ ナデ	ミガキ	暗灰黄 灰黄	褐 灰黄褐	1mm以下の灰白色・暗赤褐色粒	
38	縄文土器	浅鉢 胴部	表探	—	—	—	ミガキ	条痕のあとミガキ	黒褐 暗灰黄	黒褐	1mm以下の灰黄色・暗灰褐色粒 1mm以下の透明微細石英粒	
39	縄文土器	浅鉢 胴部	II層	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1mm以下の微細な黒色・灰褐色粒	
40	縄文土器	浅鉢 胴部	II層	—	—	—	条痕のあとミガキ	ミガキ 黒変	褐 黒褐	黄褐 暗褐	1mm以下の灰褐色・褐色粒	
41	縄文土器	浅鉢 口縁部	II層	—	—	—	横方向のミガキ	ミガキ	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の黒色・透明粒	
42	縄文土器	浅鉢 口縁部	III層	—	—	—	ヨコナデ 沈線	ヨコナデ	黒褐	にぶい黄褐	2mm以下の灰褐色粒 2mm以下の角閃石	
43	縄文土器	浅鉢 口縁部	IV層	—	—	—	条痕 保付着	条痕のあとナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	2mm以下の角閃石・石英粒 5mm以下の褐色・茶褐色・灰褐色粒	
44	縄文土器	鉢形土器 口縁部~胴部	II層	—	—	—	横方向、斜方向の条痕	ナデ 指押さえ	黒褐	にぶい黄褐	7~8mmの灰白色粒 1~2mmの黒色・褐色・灰褐色粒	
45	縄文土器	鉢形土器 口縁部~胴部	II層	—	—	—	ナデ	ナデ 条痕のあとナデ	黒褐	オリーブ黒	1~2mmの灰白・褐灰色粒 2mm以下の角閃石・石英粒	
46	縄文土器	鉢形土器 口縁部	II層	—	—	—	ヨコナデ 黒変	ヨコナデ	黒褐	褐	1~3mm以下の灰褐色光沢粒	
47	縄文土器	鉢形土器 口縁部~胴部	II層	17.8	—	—	ナデ	ナデ	暗褐色 褐色	黒褐色	1~4mmの褐灰・灰褐色粒	
48	縄文土器	深底部	II層	—	12.2	—	ナデ	ナデ	明褐	明褐	2mm以下の角閃石・石英粒 5mm以下の灰褐色・黄灰色・黒色粒	
49	縄文土器	深底部	IV層	—	5.9	—	条痕のあとナデ	条痕 ナデ	黒褐 赤褐	暗赤褐	2~5mmの灰白色粒 2mm以下の角閃石・石英粒	
50	縄文土器	深底部	II層	—	9.5	—	ナデ 指押さえ 保付着	ナデ 黒変	にぶい褐	灰褐	2mm以下の角閃石・石英粒 4mm以下の褐色・灰黄色・黄灰色粒	
51	縄文土器	深底部	II層	—	7.8	—	条痕のあとナデ	ナデ 黒変	褐 暗灰黄	黒褐	1mm以下の黒色・灰白色・透明粒	
52	縄文土器	深底部	表探	7.2	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	2mm以下の灰褐色・黄灰色粒 1mm以下の角閃石・石英粒	
60	弥生土器	壺 口縁部	II層	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	褐色 暗褐色	黒褐色	2mm以下の灰白色・灰褐色・黒色粒	
61	弥生土器	壺 口縁部	II層	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	黒褐色	褐色	2mm以下の石英・角閃石 2mm以下の黒色鈍光沢粒	
62	弥生土器	小形壺 胴部	II層	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐 灰黄褐色	褐	1~2mm大の灰褐色・褐色粒 2mm以下の角閃石	
63	土師器	壺 口縁部~胴部	IV層	24.7	—	—	ナデ 黒変	ナデ 指押さえ	褐	にぶい褐	2mm以下の黒色粒 6mm以下の褐色・灰褐色・黒色粒	
64	土師器	壺 口縁部	II層	9.3	—	—	横方向のナデ 保付着	横方向のナデ 黒変	橙	橙	1mm以下の黒色・黄灰色粒	
65	土師器	壺 胴部	II層	—	—	—	横・斜方向のハケ目	ハケ目 黒変	にぶい褐	灰黄褐	1mm以下の灰褐色・黄灰色粒	
66	土師器	壺 胴部	II層	—	3.5	—	横・縦方向のハケ目	斜方向のハケ目	にぶい褐	灰黄褐	1mm以下の黒色透明光沢粒	
67	土師器	壺 胴部	IV層	—	—	—	横・斜位のタタキ 黒変	横方向のケズリ ナデ	黒褐	暗灰黄	1mm以下の褐色光沢粒	
68	土師器	壺 底部	III層	—	1.9	—	縦方向のミガキ ナデ	縦方向のハケ目	洗黄橙	洗黄橙	7mm以下の褐色・灰・乳白色粒	
69	土師器	壺 底部	II層	—	2.0	—	ケズリのあと粗いナデ	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	暗灰黄	3mm以下の角閃石・石英粒 1mm以下の灰白色・褐灰色粒	
70	土師器	長頸壺 胴部~底部	II層	—	—	—	ハケ目	粗いハケ目	暗灰黄 洗黄褐色	暗灰黄 洗黄褐色	5mm程度の黄灰色 1mm以下の灰白色・褐灰色粒	
71	青磁	壺 口縁部	II層	—	—	—	施軸	施軸	灰オリーブ	精良	中国産(泉泉窯)	
72	陶器	壺 胴部	III層	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ 磨き条痕	にぶい黄	にぶい黄	精良	備前

第4節 大郎遺跡のまとめ

急峻な岩峰を頂く山々に囲まれた狭隘な斜面。住環境としては地形的に厳しい側面が多いと思われるこの地において、古来より人々はその環境と正対しながら生業の場を求めてきた。調査により明らかになった度重なる土石流の爪痕等を見るに付けても、地形的特質から生じる自然の脅威は時として今と同様に人々の生活基盤を根底から崩壊させる存在であったと推察できる。

本節では丘陵斜面で検出された竪穴住居跡と調査区内から出土した遺物およびその出土状況をもとに考察を加え、本遺跡の性格について若干の知見を述べまとめとしたい。

1 遺構

確認された3軒の竪穴住居跡はそれぞれ斜面という地形的特徴を巧みに利用して掘り込まれていることと検出時の上端から床面までの最大深度が1.3m前後であることは共通している。しかし、1号住居跡が1辺4mを超える方形プランを呈するのに対し、2号と3号住居跡はそれと比較して規模的に小さく、床面積の比較では1号住居跡（約14.46㎡）、2号住居跡（約4.07㎡）、3号住居跡（約3.65㎡）となり、1号と2・3号という分類が可能である。遺跡内で隣接する3つの住居跡に見られるこのような相違は、遺物からの支持は弱いが時期差と捉えることが妥当であると考えられる。

2 遺物

土器

大郎遺跡で確認できた土器は縄文時代後晩期から古墳時代前期の土師器であるが、点数としては縄文時代晩期の土器がその大半を占め、大別すると晩期を中心とする無刻目突帯文土器の一群と御領・三万田式土器の系譜上にある顕著なミガキ等の調整を特徴とする精製磨研土器の一群に二分できる。

無刻目突帯文土器の一群には内傾もしくは内傾したのち外反する口縁部をもち、胴部中位より上で内側に向かって屈曲しそこを最大径とするものと、直立もしくはやや外方に向かい立ち上がる口縁部をもつ2つのタイプが認められる。いずれも内外器面ともに調整の際の貝殻条痕が顕著である。

精製磨研土器の破片は、口縁部もしくは屈曲を伴う胴部から頸部への変化点付近が多い。口縁部の破片の中には口唇部直下の外面もしくは内面に沈線を施すものが数点認められるが、口縁部外面の沈線が比較的細線であるのに対して口縁部内面に施された沈線はやや太めとなる傾向がある。その他に器形のバリエーションとしては、短頸となるもの（41）、鉢状の器形を呈するもの（42・43）、口縁に向かってすぼまる器形を呈するもの（44～47）などが認められる。

石器

本遺跡における石器の出土点数は、土器と比較すると極端に少なく石核や剥片等も確認できなかった。このことから、本遺跡内においては石器製作が行われた可能性はかなり低いと考えられる。しかしながら、55の異形石器の存在は数少ない石器の中では特筆されるべきものであろう。

今回の調査で検出された3軒の竪穴住居跡からは、土石の流入等により遺構内から良好な状態で遺物の出土を見ることができなかった。したがって、埋土中に混在した遺物の様相から遺構の時期考察へと短絡的に言及することは避けたい。また、遺物についても丘陵斜面かつ土石と混在するものが多かったという事実から、それらの原位置については調査区外から流入した可能性を考慮する必要がある。



①大郎遺跡と遠景（東北東方向を望む）



①大郎遺跡全景（上から）



②1号竪穴住居跡土石流入状況



③1号竪穴住居跡完掘状況



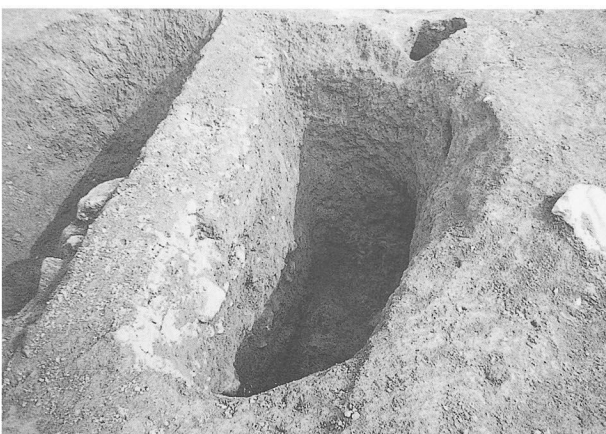
④1号竪穴住居跡内配石遺構



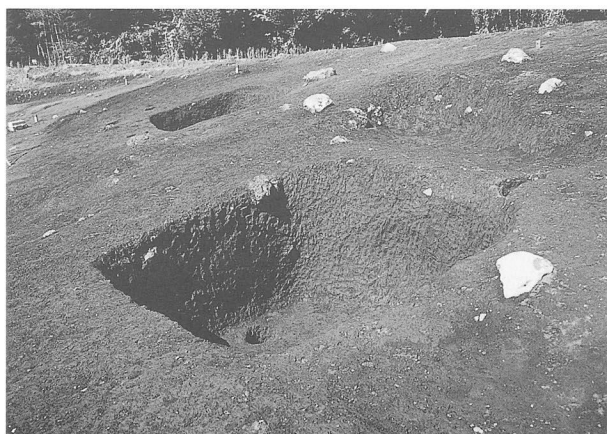
⑤2号竪穴住居跡埋土状況



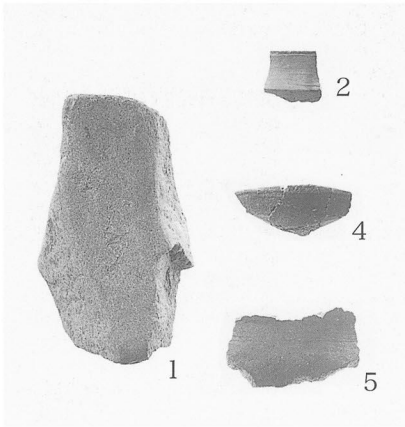
⑥2号竪穴住居跡完掘状況



⑦3号竪穴住居跡埋土状況



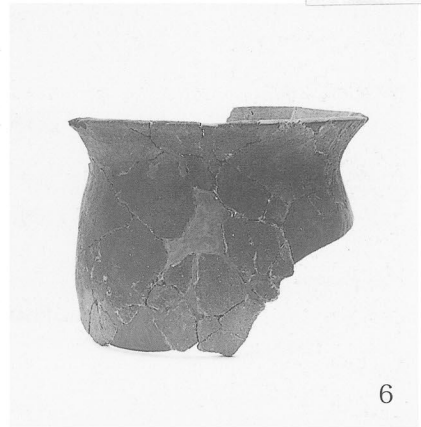
⑧3号竪穴住居跡完掘状況



① 1号竖穴住居跡出土遺物 1



② 1号竖穴住居跡出土遺物 2



③ 1号竖穴住居跡出土遺物 3



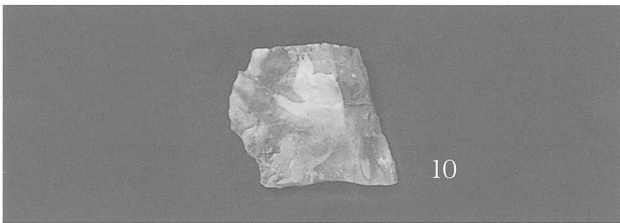
④ 1号竖穴住居跡出土遺物 4



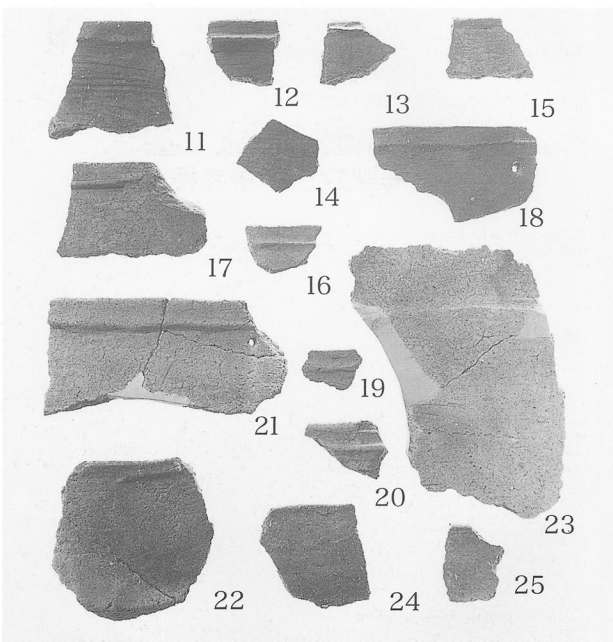
⑤ 1号竖穴住居跡出土遺物 5



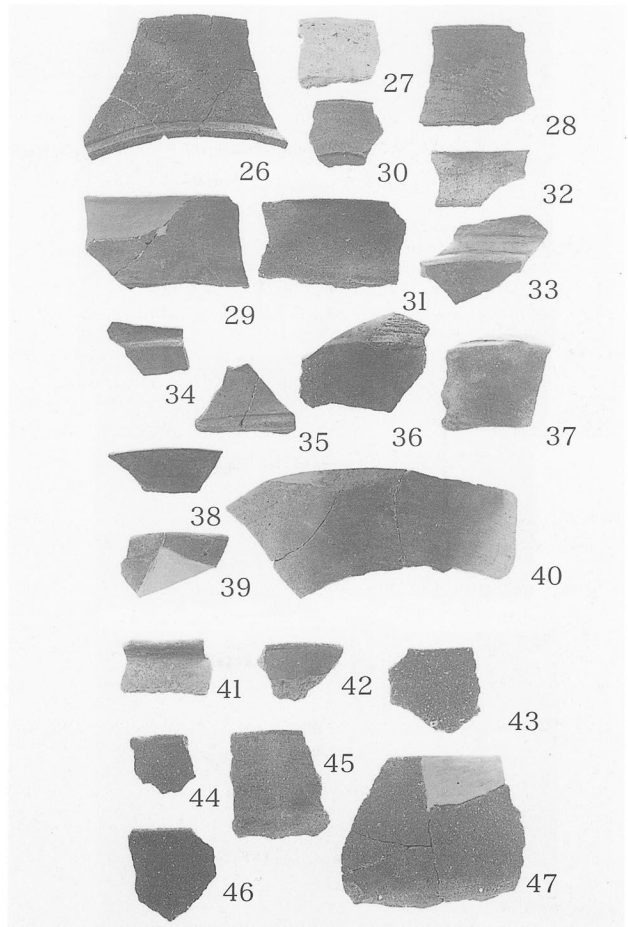
⑥ 1号竖穴住居跡出土遺物 6



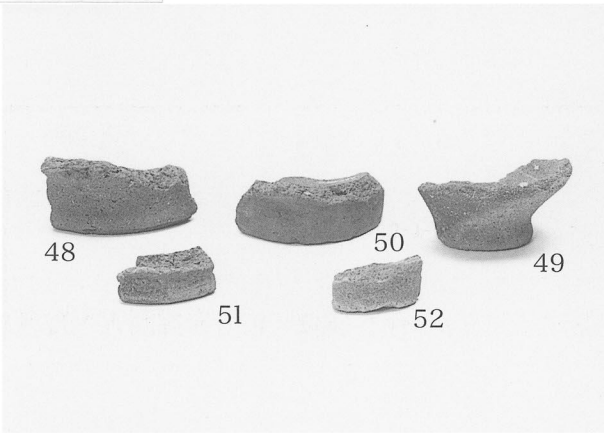
⑦ 2号竖穴住居跡出土遺物



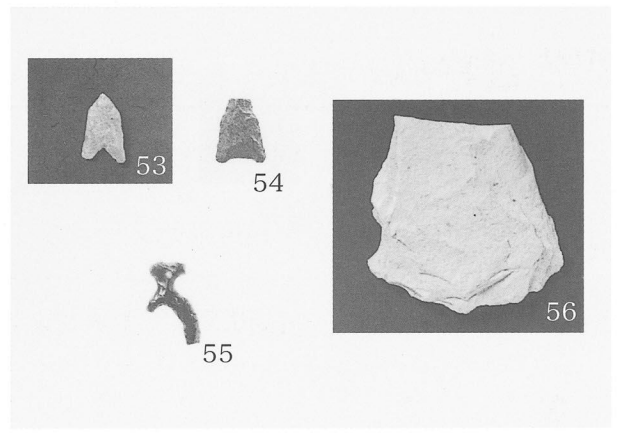
⑧ 大郎遺跡出土縄文土器 (I類・II類)



⑨ 大郎遺跡出土縄文土器 (III~VII類)



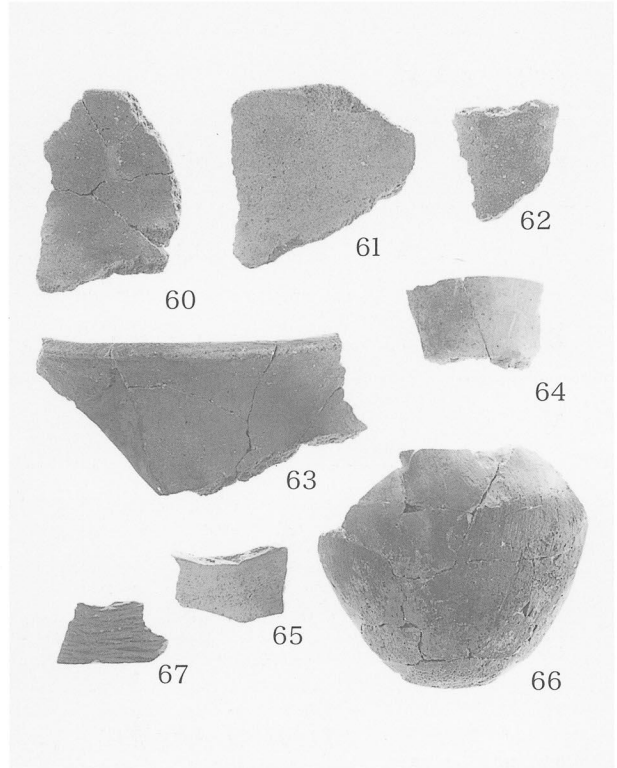
①大郎遺跡出土縄文土器 (Ⅷ類)



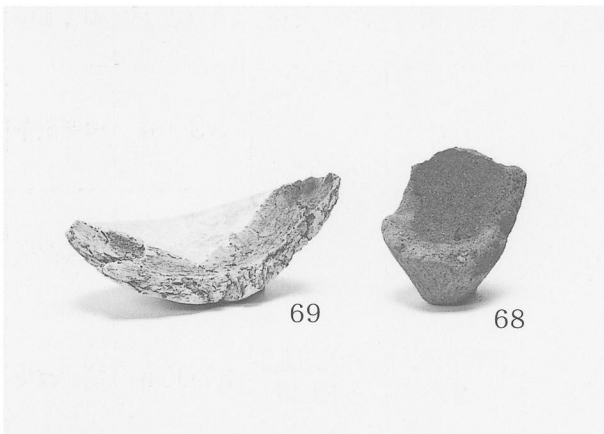
②大郎遺跡出土石器 1



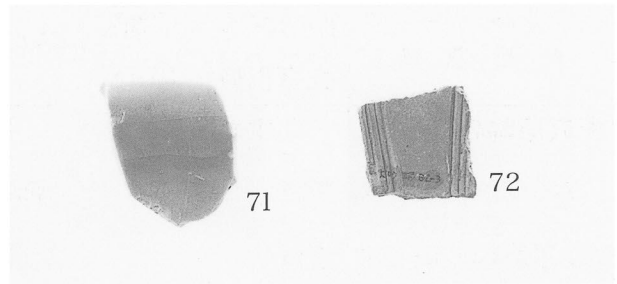
③大郎遺跡出土石器 2



④大郎遺跡出土土器 1 (弥生～古墳)



⑤大郎遺跡出土土器 2 (弥生～古墳)



⑦中世陶磁器 (上：内面、下：外面)



⑥大郎遺跡出土土器 3 (免田式)